

(28) SK185

検出面と位置 SK185(第74図)は第Ⅱ面で検出された。検出された位置は調査区北西部で、SK294の南西側に位置する。第Ⅱ面における本土坑の周辺は、比較的遺構が疎らな状況である。

規模 遺構の平面プランは楕円形基調を呈する。規模は長さ1.4m、幅1.15mで、深さ0.1~0.15mを測る。床面は西に向かい緩やかに傾斜している。壁の立ち上がりは緩やかで、断面皿状にちかい形態を呈する。

集石 土坑の上層には礫が集中する。礫は5~20cm大のものがみられるが、大半は5~10cm大のものである。礫は床面から0.2mほど浮いた状況である。

遺構内からの

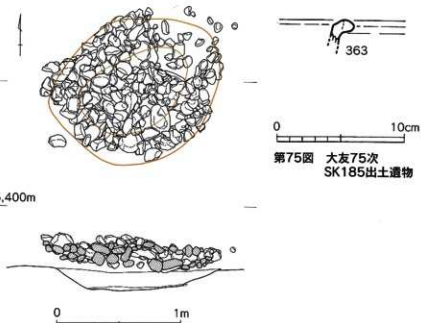
出土の遺物は少量で、流れ込んだわずかな土器小片が確認されたのみである。

出土遺物

363(第75図)は土鍋の口縁部であろう。内面にハケメが施される。14世紀代のものか。

土坑の時期

土坑の時期については不明である。



第75図 大友75次 SK185出土遺物

第74図 大友75次SK185

(29) SK187

位置と検出面 SK187(第77図)は調査区中央北側のB61区に位置する。検出されたのは第Ⅱ面で、いくつかの遺構と重複した状況である。SE186を切っている。

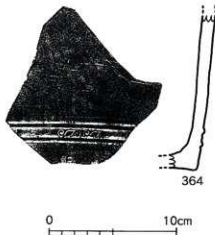
規模 土坑の平面プランは不定形で、長さ1.2m、幅1.0mを測る。深さは0.7mと比較的深く、床面はわずかに傾斜するものの、比較的平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

土坑内の状況 土坑内からは、10~15cm大の礫が散発的に出土している。床面直上のものはないが、下層から上層にわたりみられる。

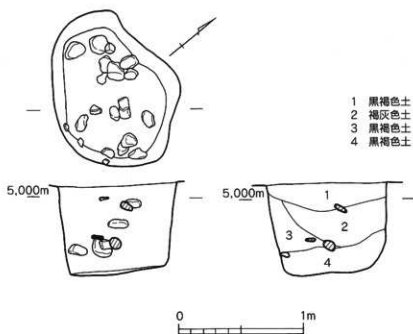
遺物の出土量は少なく、礫に混じり土器片が出土したのみである。

瓦質土器火鉢 364(第76図)は瓦質土器火鉢である。底部資料で、細く低い突帯の間にスタンプ文が付される。16世紀後葉を下限とするものか。

土坑の時期 本土坑は16世紀後葉を下限とする。



第76図 大友75次SK187出土遺物

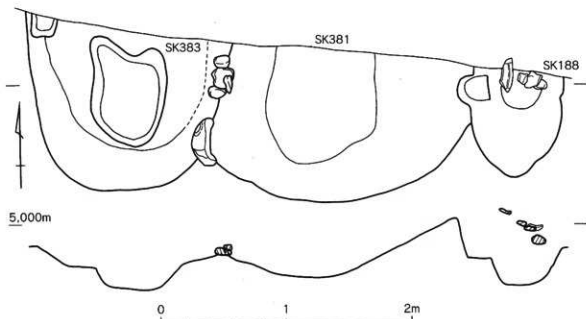


第77図 大友75次SK187

(30) SK188, SK381, SK383

検出面と位置 SK188, SK381, SK383 (第78図) は第Ⅱ面で検出された。調査区北端中央部のE61区に位置しているが、いずれも調査区外に及ぶため、その全容は明らかではない。これらの土坑は、重複しながら連続的にみられる。切り合いの順は、SK383→SK381→SK188である。図示していないが、SK188の東南にSK189があり、SK188が切っている。

SK188 SK188は南北方向に主軸をもつ土坑で、楕円形基調を呈するものと思われるが、北半は調査区外に及ぶ。規模は南北が0.85m以上、東西0.8mである。深さは0.4~0.6mで、土坑内から土器片や礫が確認された。これらは、いずれも上層から中層にかけて、流れ込みの状態で出土した。床面か



第78図 大友75次SK188,SK381,SK383

らの出土はなかった。

SK381 SK381も北半が調査区外に及ぶが、東西に長軸をもつ楕円形ないしは不定形を呈すると推定される。規模は現存長で、東西2.0m、南北1.2mである。深さは0.2~0.45mで、床面は平坦面をもたず、緩やかに最深部にいたる。土坑内からの出土遺物は、土坑規模のわりには非常に少なく、図示できる土器はなかった。

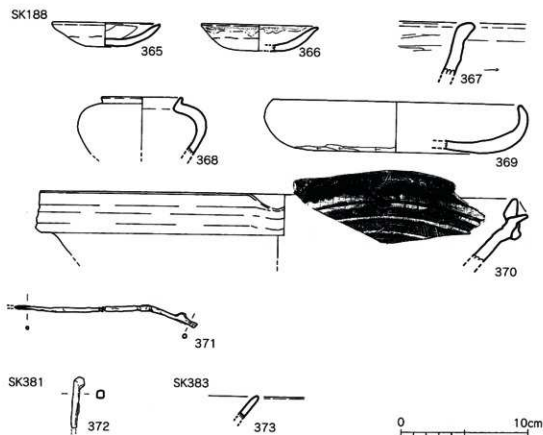
SK383 SK383は円形基調を呈するものと推測されるが、北半は調査区外に及ぶ。規模は現存長で、東西1.6m、南北1.3mである。土坑は二段掘りになっており、上端から0.1~0.2mで一旦段をなし、その段から0.2mで底部にいたる。本土坑からも遺物の出土は少なく、小土器片がわずかに確認されたのみである。

出土遺物 以下、各土坑からの出土遺物（第79図）を紹介する。

SK188の出土遺物のうち、365、366は京都系土師器である。365が口径8.6cm、366が復元口径9.2cmを測るもので、両者とも厚手である。16世紀後葉に比定されよう。367は瓦質土器鉢である。口縁部外側が肥厚するもので、体部外面には横方向のヘラケズリが施される。368~370は焼締陶器である。368は備前焼と思われる小壺で、復元口径6.5cmを測る。体部は肩部が張り、口縁部が斜方向に短く立ち上がる。369は備前焼と思われる鉢である。復元口径19.6cmを測るもので、底部は上げ底状を呈する。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁にいたる。底部はヘラケズリが施される。370は備前焼罎鉢である。371は銅製品で、方形の突起を有する。

SK381出土遺物のうち図示できるのは372の鉄製釘のみである。先端部を欠くが、頭部を折り曲げ断面方形を呈する。

SK383出土遺物も図示できるものは少なく、373の青磁碗のみである。口縁部の破片で、直口口縁を呈する。



第79図 大友75次SK188,SK381,SK383出土遺物

(31) SK189

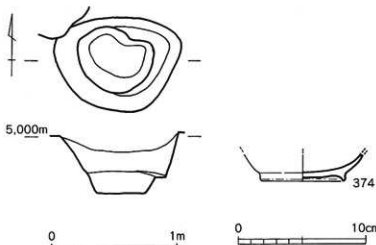
位置と検出面 SK189 (第80図) は調査区北端中央部のE61区に位置しており、第II面において検出された。本土坑の周辺には、やや大型の遺構が集中しており、北西側にはSK188、SK381、SK383が並び、南側にはSK98、SE186、SK187などがみられる。このうちSK188と重複しており、わずかに切られる。

規模 土坑の平面プランは円形基調を呈しており、その規模は東西1.0m、南北0.8mである。深さは比較的深く、途中に段をもち床面まで0.5mを測る。床面は平坦である。

土坑内からは、10cm大の礫と遺物が散発的に出土した。これらはいずれも上層から中層にかけて出土しており、床面からの出土はなかった。

出土遺物

出土遺物 (第81図) は少なく、図示できるのは374の白磁皿のみである。口縁部を欠く、底部から体部にかけての資料である。底径6.6cmを測り、畳付は露胎である。口縁部は端反りを呈するものと思われる。16世紀前半に位置づけられる。



第80図 大友75次SK189

第81図 大友75次SK189
出土遺物

土坑の時期

本土坑は16世紀代に比定される。

(32) SK191

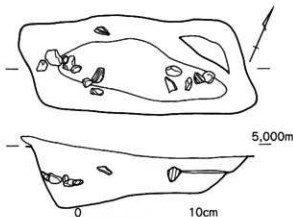
位置と検出面 SK191 (第82図) は、調査区中央やや西寄りのE62区に位置しており、第II面で検出された。本土坑の周囲には、井戸(SE149、SE170、SE216) や土坑(SK148、SK266) などの大型の遺構がみられる。SK191はSE149と重複しており、これを切る。

規模 土坑の平面形は、東西方向に長軸をもつ長方形を呈する。その規模は、東西1.7m、南北0.7~0.75mである。深さは0.3~0.5mで、壁はやや斜方向に立ち上がる。床面は平坦ではなく、東から西に向かい傾斜している。土坑内からは、5

~10cm大の礫とともに土器片が出土した。これらの大半は、上層から中層にかけて出土した。

出土遺物

出土遺物 (第83図) のうち、375は京都系土師器である。復元口径8.2cmで、厚手のものである。376は瓦質土器火鉢である。外面口縁下の突帯間に、雷文のスタンプ文がみられる。377は中国景德鎮窯系青花小坏で、口縁部が端反りである。



第82図 大友75次SK191

土坑の時期

以上の出土遺物から、本土坑の時期は16世紀後葉~末に位置づけられよう。

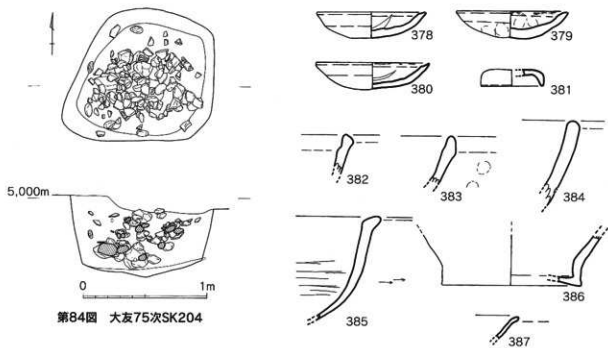


第83図 大友75次SK191出土遺物

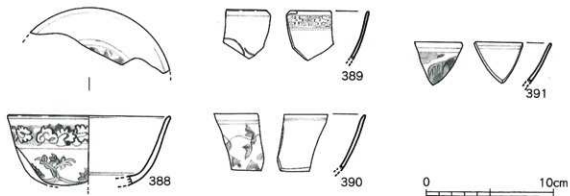
(33) SK204

位置と検出面 SK204(第84図)は第Ⅱ面で検出された。本土坑の位置するD61区は、調査区西寄りに位置し、周辺にはSK130、SK147、SK275などの大型土坑がみられる。この中のSK275と重複しており、これを切る。また、同位置の第Ⅲ面からは、大型の不定形土坑であるSK445が確認されている。層位的にみて、本土坑はSK445よりも後出する。

規模 土坑の平面形は方形基調の不定形を呈しており、東西1.9~2.4m、南北1.8~2.1mを測る。深さ



第84図 大友75次SK204



第85図 大友75次SK204出土遺物

は0.55～0.65mである。壁の立ち上がりは急で、床面は平坦でない。壁際から中央に向かい、緩やかに傾斜する。土坑内からは、5～10cm大の礫とともに土器などの遺物が出土した。これらは、下層から上層にかけて確認された。

京都系土師器 出土遺物（第85図）のうち、378～380は京都系土師器である。いずれも口径9cm前後のもので、378、380は口縁端部が尖り気味で、端部内面側に明確な面が形成される。以上は16世紀後葉～末に位置づけられる。381は焼塩釜の蓋である。

瓦質土器 382～385は瓦質土器である。382は鍋、383と384は鉢である。385も鉢で、口縁端部外側が肥厚する。内面には板状工具による横方向のナデが、また外面にはケズリがみられる。

焼締陶器 386は焼締陶器底部で、復元底径は11cmと比較的小振りである。387は口縁部端反の白磁皿である。青花 388～391は中国景德鎮窯系青花碗である。388は小野正敏分類の碗D群に相当する。389～391は碗E群で、389は外面に暗花文がみられる。

土坑の時期 以上から、本土坑の時期は16世紀後葉～末に比定される。

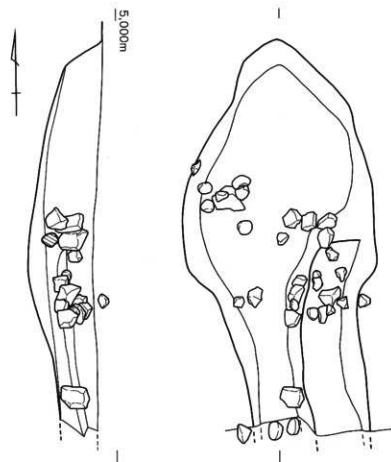
(34) SK205

位置と検出面 SK205（第86図）は南北方向に長軸をもつ不定形土坑で、調査区西北部のC61・D61区に位置する。第Ⅱ面で検出されており、周辺にはSK291、SK292がみられる。また、同位置の第Ⅲ層にはSK584があり、本土坑は層位的にSK584に後出することが分かる。

本土坑は、南端を水路により破壊されているが、その規模は南北が現存長3.1m、東西0.9～1.5mである。深さは0.3～0.5mで、床面は高低差をもつ。土坑内には10～25cm大の礫がみられたが、土器等の遺物は少ない。

出土遺物（第87図）は、392の龍泉窯系青磁碗である。鎮蓮弁文をもつもので、13世紀代に比定される。

本土坑の時期は、16世紀代に比定されよう。



0 1m

第86図 大友75次SK205



0 10cm

第87図 大友75次SK205
出土遺物

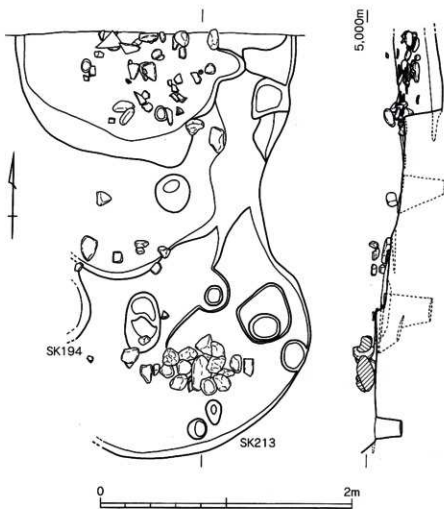
(35) SK213、SK194

位置と検出面 SK213（第88図）は調査区中央付近のE61・F61区に位置する。第Ⅱ面で検出されたもので、周辺には土坑や柱穴がみられる。また、同位置の第Ⅲ面からもSK676などの土坑や柱穴がみられるが、層位的にはこれらよりも本土坑が検出する。

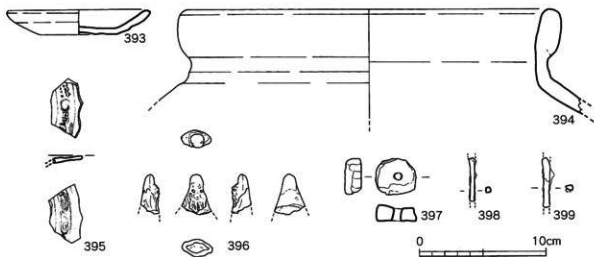
規模 本土坑は、一部が水路で壊されたり、残存状況が良くない部分があるなどして全容は不明であるが、大型の不定形を呈するものと思われる。その規模は、南北が現存長3.3m、東西が現存長1.5～2.2mを測る。深さは0.15～0.65mで、床面は平坦でなく南から北に向かい深くなる。このうち、深さ0.65mを測る部分は、東西1.8m、南北現存長1.0mの楕円形基調を呈しており、他の土坑が切り合っている可能性をもつ。土坑内からは、0.1～0.25mの礫とともに土器片などが出土した。これらは、下層から上層にかけて出土した。

SK194 本土坑と切り合い関係にあると思われるのが、SK194である。SK194は西半の残存状況が良くないため全容は不明であるが、径1m程の円形基調を呈するものと思われる。

SK213の遺物 SK213の出土遺物（第89図）のうち、393は京都系土師器である。やや厚手のもので、16世紀後葉～末に位置づけられる。394は備前焼甕である。口縁部は外面の玉縁が長くのびるが、凹縁はみられない。16世紀中葉までにおさまるものである。395は中国景德鎮窯系青花皿で、小野正敏分類の皿F群に相当する。396は中国産華南三彩で、長い髷をもつ人物の頭部を象っているものである。器形などは不明である。397は円形の有孔石製品である。軽石製で、径3cmの円形に成形され、中



第88図 大友75次SK213、SK194



第89図 大友75次SK213出土遺物

尖に径0.6cmの孔が穿たれる。重量6.8gで、浮と思われる。
398、399は鉄製の釘である。いずれも頭部、先端を欠くものであるが、現存長約4cmを測る。

以上の遺物から、SK213は16世紀後葉～末に比定されると思われる。

SK194の遺物

SK194の出土遺物（第90図）は少量である。このうち、400は京都系土師器である。薄手で、口径14.2cmを測る。本資料は16世紀中葉に位置づけられる。

SK194の時期は、SK213との切り合い関係から、16世紀後葉～末以降と思われる。



第90図 大友75次SK194出土遺物

(36) SK217

位置と検出面

SK217（第91図）は第Ⅱ面で検出されたもので、調査区中央南側のE62区に位置する。本土坑の周辺には、近接する位置に土坑(SK148、SK191、SK737)や井戸(SK149、SK216)などの比較的大型の遺構がみられる。しかし、本土坑とこれらの遺構に重複関係はない。また、同位置の第Ⅲ面からは大型の堅穴遺構であるSB628が確認されている。層位的に、本土坑がSB628に後出することが分かる。

規模

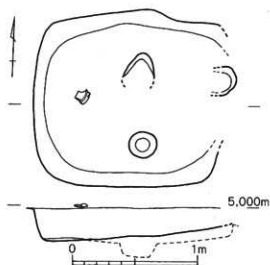
土坑の平面プランは方形を呈する。東側の遺構ラインが不明瞭であるが、その規模は東西1.5m、南北1.4mを測る。深さは0.1～0.2mで、床面は比較的平坦であるが、西から東に向かい浅くなる。壁は直立気味に立ち上がる。

遺物出土状況

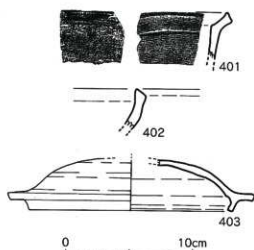
土坑内からの出土遺物は少量で、小土器片が散発的に出土したのみである。床面からの出土はなく、いずれも中・上層で確認された。

出土遺物

出土遺物（第92図）のうち、401、402は瓦質土器である。401は鍋である。口縁部が短くくの字状に外方に折れるもので、内面には横方向のハケメが施される。14世紀初に比定される。402は鉢と思われる。403焼締陶器備前焼水差の蓋で、は復元口径16.2cmを測る。16世紀後半代の所産か。



第91図 大友75次SK217



第92図 大友75次SK217出土遺物

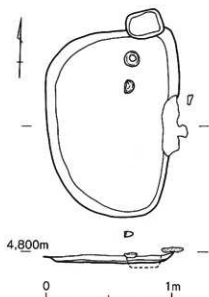
(37) SK220

位置と検出面 SK220(第93図)は調査区中央北側に位置するもので、第Ⅱ面から検出された。周辺には土坑や柱穴がみられ、柱穴から切られる。

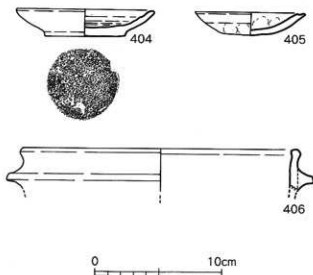
規模 土坑は南北方向に長軸をもつもので、その規模は、南北1.3~1.5m、東西0.9~1.05mである。深さは0.05mと浅く、かろうじて床面が残存したという状況である。土坑内からは完形品にちかい土器などが出土したが、その数は少数で、いずれも上層から確認されている。

出土遺物 出土遺物(第94図)のうち、404は底部糸切りの土師質土器である。厚い底部から体部が斜方向に立ち上がるもので、内面下半にロクロ痕が残る。16世紀前・中葉のものである。405は京都系土師器で、16世紀後葉に比定される。406は鍋で、口縁下に鈿が付される。鈿は高さ1cm余と比較的高いもので、13世紀代のものと思われる

土坑の時期 以上から、本土坑の時期は16世紀後葉に位置づけられる。



第93図 大友75次SK220



第94図 大友75次SK220出土遺物

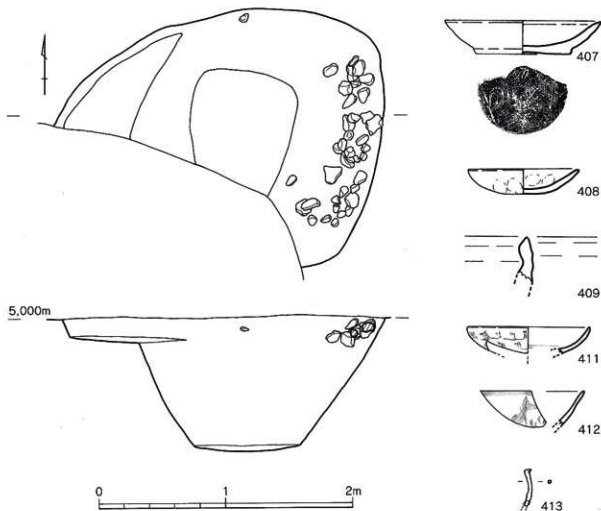
(38) SK266

位置と検出面 SK266(第95図)は第Ⅱ面の中央やや西寄りで検出された。周辺には土坑(SK203、SK148、SK191)や井戸(SE149、SE170)などの大型遺構がみられ、SK203とSE170に切られる。

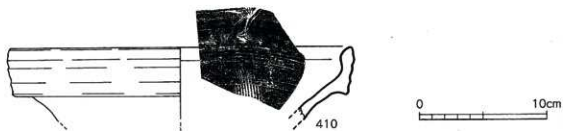
規模 土坑は不定形を呈するもので、一部二段掘り状をなす。規模は、東西2.6m、南北2.05m、深さ1.0mを測る。床面は比較的狭く、壁が斜方向に立ち上がる。

遺物出土状況 土坑内東側の最上層から、まとまった状態で10~15cm大の礫が出土した。遺物は土坑規模のわりには少なく、土坑内から破片資料が散発的に出土した。16世紀後葉である。

出土遺物 出土遺物(第96図)のうち、407は底部糸切りの土師質土器である。口縁端部内外面をつまみ、わずかに外反気味にする。京都系土師器を模倣したもの。408は京都系土師器である。409、410は備前焼播鉢である。いずれも口縁端部上面が内傾するもので、乗岡の中世6期である。411、412は



第95図 大友75次SK266



第96図 大友75次SK266出土遺物

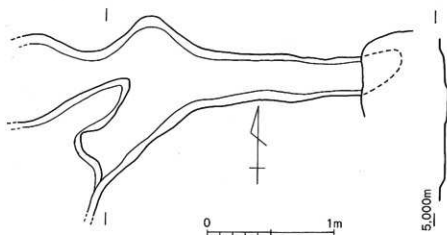
青花である。411は中国景德鎮窯系で、小野正敏分類の皿C群に相当する。412は中国漳州窯系の碗である。413は鉄製釘である。

(39) SK270

位置と検出面 SK270 (第97図) は第Ⅱ面の西南隅D62区で検出された。東端がSK101と重複しており、SK101に切られる。

規模 土坑は東西に溝状に長いもので、その規模は東西が現存長2.7m、南北が現存長0.3~1.4mである。深さは0.05~0.1mと浅い。土坑内からの遺物の出土は少なく、散発的に土器片が確認されたのみである。

出土遺物 出土遺物 (第98図) は414の京都系土師器である。復元口径23.0cmを測る大型品で、器壁も厚い。16世紀後葉~末に位置づけられる。



第97図 大友75次SK270



第98図 大友75次SK270出土遺物

(40) SK275

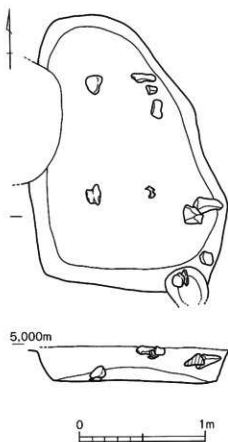
位置と検出面 SK275 (第99図) は調査区西寄りに位置するもので、第Ⅱ面で検出された。周辺にはSK130、SK147、SK204などの比較的大型の土坑がみられる。本土坑はSK204と重複しており、これに切られる。あた、同位置の第Ⅲ面ではSK445が検出されているが、層的にみて、本土坑がSK445に後出することが分かる。

規模 土坑は南北に長軸をもつ不定形で、その規模は南北2.1m、東西0.8~1.6mである。深さは0.3mで、床面は平坦である。

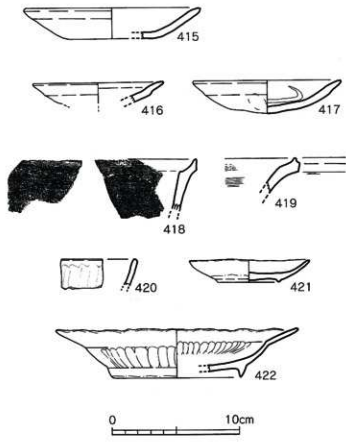
遺物出土状況 土坑内からは裸とともに土器片などの遺物が、下層から上層にかけて散発的に出土した。

出土遺物 出土遺物 (第100図) のうち、415~416は京都系土師器である。このうち415は16世紀中葉に、416、417は16世紀後葉に比定される。418、419は鍋である。418は14世紀初~前葉のものである。420は中国産青磁碗で、外面に剣先蓮弁文がみられる。421、422はともに白磁皿である。

土坑の時期 以上から、本土坑の時期は16世紀後葉~末に位置づけられる。



第99図 大友75次SK275



第100図 大友75次SK275出土遺物

(41) SK276

位置と検出面 SK276 (第101図)は調査区東よりのG62区に位置する。第Ⅱ面で検出されたもので、周辺には土坑(SK050、SK290、SK302)や柱穴が多くみられる。

土坑はSK276AとSK276Bからなっている。これらは本来別々の土坑が切り合ったもので、SK276BがSK276Aを切る。

SK276A SK276Aは、東半の残存状況が悪く、また西端をSK276Bに切られるため全容が不明であるが、不定形を呈するものと思われる。その規模は、南北が1.2~1.8m、東西が現存長0.9mである。深さは0.1mと浅く、一部二段掘り状を呈するが、床面は平坦である。土坑内からの遺物の出土は少なく、土器片が散発的に出土したのみである。

SK276B SK276Bは、東西方向に長軸をもつ方形を呈する。その規模は、東西1.0m、南北0.8~0.9m、深さ0.2mである。壁は直立気味に立ち上がり、床面は平坦である。土坑内からは10cm大に礫が数個かたまって検出されたが、目立った遺物の出土はなかった。

SK276A 紹介する出土遺物(第102図)は、SK276Aから出土したものである。

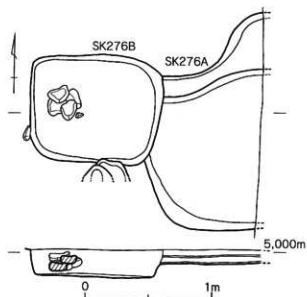
出土遺物 423は土師質土器小皿である。底部糸切りで、厚い底部から体部が直立気味に立ち上がる。14世紀代の所産であろう。

424が瓦質土器甕である。口縁部を外方に折り曲げる。

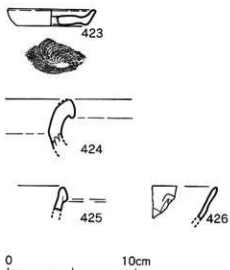
425は中国産白磁碗の口縁部である。玉縁を呈するもので、12世紀代に比定されるものである。

426は中国龍泉窯系青磁碗で、外面に鋪蓮弁文がみられる。13世紀代のものである。

土坑の時期 以上から、SK276Aは14世紀代に位置づけられる。



第101図 大友75次SK276

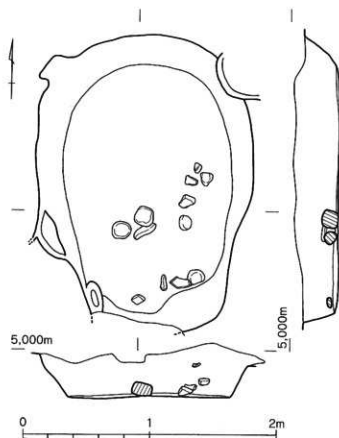


第102図 大友75次SK276出土遺物

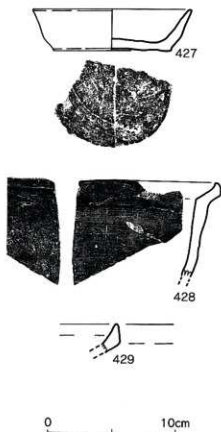
(42) SK283

位置と検出面 SK283 (第103図) は中央やや東寄りのE61・E62区に位置するもので、第II面から検出された。わずかに柱穴などと切り合うが、全容を知ることができる。

規模 土坑の平面形は楕円形基調を呈するもので、南北方向に長軸をもつ。その規模は南北2.2m、東



第103図 大友75次SK283



第104図 大友75次SK283出土遺物

西1.6～1.75mである。深さは0.3～0.4mで、床面は平坦である。

遺物出土状況 土坑内からは、10cm大の礫などとともに遺物が出土した。それらは、床面直上から上層にかけてみられた。土器は破片資料のみである。

出土遺物 出土遺物（第104図）のうち427は土師質土器環である。体部は底部から直立気味に立ち上がる。体部は口縁部がやや尖り気味である。復元口径12.5cmを測るもので、14世紀前半代のものか。

428は鍋である。口縁部が外方に折れるもので、14世紀初の所産か。

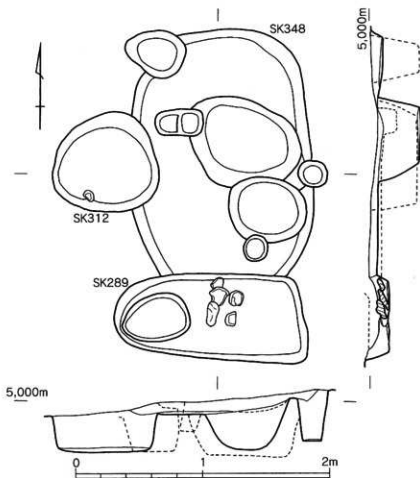
429は東播系こね鉢である。

土坑の時期 以上から、本土坑の時期は14世紀前半代に位置づけられる。

(43) SK289、SK312、SK348

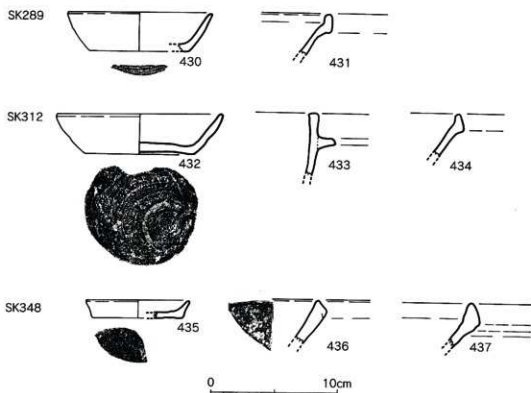
位置と検出面 SK289、SK312、SK348（第105図）は調査区中央やや東寄りのF62区に位置するもので、第II面から検出された。これらに加えいくつかの柱穴や小土坑が複雑に重複している。これらの遺構の前後関係をみてみると、SK348が最も古く、SK348を他の遺構が切り込んでいる。以下、各遺構を紹介する。

SK289は、東西方向に長軸をもつ長方形基調を呈するものである。土坑内には柱穴が1本切り込むが、遺構の全形は明らかである。その規模は、東西1.5m、南北0.35～0.5m、深さ0.15mである。床面は平坦で、壁が直立気味に立ち上がる。中央北側には10～15cm大の礫が数個確認された。これらは、すべて床面直上から出土した。遺物については、土器片などが散発的に出土したのみで、その量は少ない。



第105図 大友75次SK289,SK312,SK348

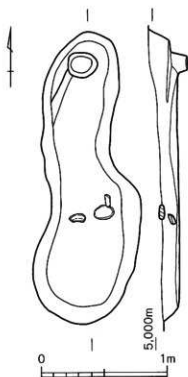
- 出土遺物 SK289からの出土遺物（第106図）には土師質土器と須恵器こね鉢がある。
430は土師質土器環である。底部糸切りで、体部の立ち上がりはシャープである。復元口径11.4cmを測る。
431は東播系須恵器こね鉢で、口縁端部が上方に立ち上がる。
土師質土器の形態などから、SK289の時期は14世紀前半代に位置づけられる。
- SK312 SK312は、円形基調を呈するものである。規模は径0.8~0.85mで、深さは0.3mを測る。床面は平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。土坑内からは土器片などが出土したが、その量は少なく、床面からは検出されていない。
- 出土遺物 SK312からの出土遺物（第106図）には土師質土器、瓦質土器、須恵器などがある。
432は土師質土器環で復元口径13.0cmを測る。底部と同じ厚みの体部が斜方向にシャープに立ち上がる。14世紀前半代のものか。
433は瓦質土器の鍋である。外面口縁下に鈔が付されるもので、鈔は約1.5cmと比較的高い。13世紀以前のものである。434は東播系のこね鉢か。
以上から、SK312の時期は、14世紀前半代に位置づけられる。
- SK348 SK348は、SK289やSK312などから切られているが、その全容を凡そ知ることができる。平面形は南北方向に長軸をもつ楕円形を呈する。その規模は、南北が現存長1.9m、東西1.4mである。深さは0.1m弱と比較的浅く、出土遺物も小土器片が散発的に出土したのみである。
- 出土遺物 出土遺物（第106図）のうち、435は土師質土器小皿で、復元口径8.2cmを測る。436は瓦質土器鉢、437は東播系こね鉢である。
切り合い関係から、SK348の時期は14世紀前半代に比定される。



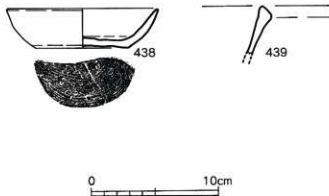
第106図 大友75次SK289,SK312,SK348出土遺物

(44) SK290

- 位置と検出面 SKL290 (第107図) は、SK289などに隣接するF62区に位置するもので、第II面から検出された。
- 規模 土坑の平面形態は細長い瓢箪形を呈し、南北方向に長軸をもつ。その規模は南北2.3m、東西0.5~0.7mである。深さは0.15~0.2mを測り、床面は比較的平坦である。土坑内からは土器片などが散発的に少量出土した。
- 出土遺物 出土遺物 (第107図) のうち、438は土師質土器環である。底部と同じ厚みの体部が内湾気味に口縁部にいたる。復元口径11.8cmを測るもので、14世紀前半代のものか。439は東播系のこね鉢である。
- 土坑の時期 以上から、本土坑の時期は14世紀前半代に比定される。



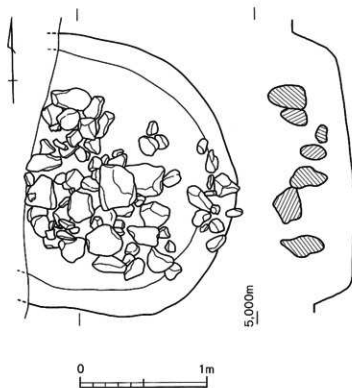
第107図 大友75次SK290



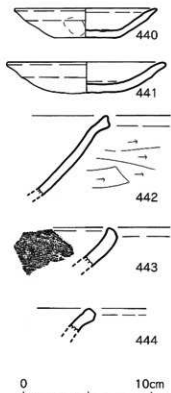
第108図 大友75次SK290出土遺物

(45) SK291

- 位置と検出面 SK291 (第109図) は調査区北西済のC61区に位置し、第II面で確認された。周辺には、やや大型の不定形土坑であるSK205やSK292などがみられる。
- 規模 土坑は西半が調査区外に及ぶため全形が不明であるが、円形基調を呈するものと思われる。その規模は南北2.2m、東西が現存長1.6mである。深さは0.35~0.4mで、壁は直立気味にたつ。床面は壁際から中央に向かい緩やかに低くなる。
- 遺物出土状況 土坑内からは、10~35cm大の礫が多数出土した。礫は下層から上層にかけてみられ、これらとともに遺物が出土した。
- 出土遺物 出土遺物 (第110、111図) には京都系土師器、瓦質土器、焼締陶器備前焼、中国産磁器、瓦、鉄製品などがある。
- 京都系土師器 440と441は京都系土師器である。440はやや箱形をなすが、441は丸底状をなす。これらは16世紀中葉~後葉に位置づけられる。



第109図 大友75次SK291



第110図 大友75次SK291出土遺物(1)

瓦質土器

442～447は瓦質土器である。442は丸底を呈する大型の鍋で、外面にケズリが施される。443は瓦質土器鉢で内面に横方向のハケメが施される。14世紀代のものか。444は鍋の口縁部か。445は甕である。なで肩状を呈する体部から頸部がわずかにしまり、頸部が短く直立し口縁部にいたる。頸部には縦方向の短沈線が3本単位で施される。また、体部内面には横方向のハケメがみられる。16世紀後半代に主体を置くものと考えられる。446は鉢である。口縁部に向かいわずかに内湾気味で、端部はつまみあげられ、やや尖り気味である。447は火鉢の口縁部である。器壁は厚く、外面口縁下に細く低い突帯が2条付される。

備前焼

448は備前焼甕である。口縁部外面は玉縁状を呈するが、顕著な発達は見られない。15世紀代のものであろう。

青磁

449は青磁碗底部である。体部外面に鎬蓮弁文の一部が残存する。13世紀代のものである。
450は高台をもつ椀である。高台は低く、径も小さい。体部外面下半には、横方向のヘラケズリが施される。16世紀代のものか。
451は香炉の底部と思われる。底径5cmほどの小型品で、厚い底部から体部が立ち上がるものである。底部には低い脚が3本付される。

瓦

452は平瓦である。
453は土唾である。

石製品

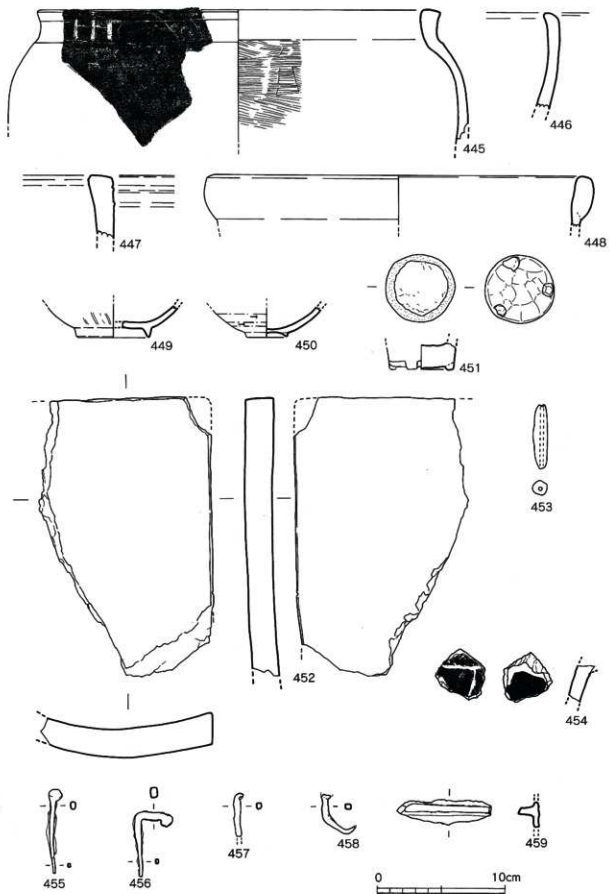
454は滑石製石鍋である。再用品で、口縁下の突帯部分を削り落としている。

鉄製品

455～458は鉄製の釘である。いずれも頸部を折り曲げ、断面方形を呈する。
459は不明鉄器である。

土坑の時期

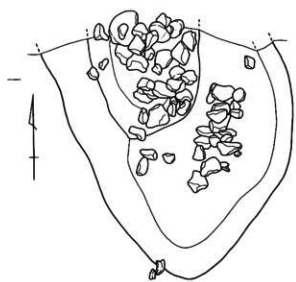
本土坑の時期は16世紀中葉～後葉に位置づけられる。



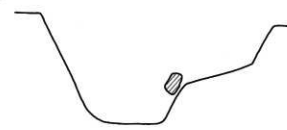
第111图 大友75次SK291出土遺物(2)

(46) SK292

| | |
|----------------|--|
| 位置と検出面 | SK292(第112図)は第Ⅱ面において確認された。本遺構は調査区西北隅のC60・C61・D60区にまたがる部分に位置しており、周辺にはSK205やSK291などの比較的大型の土坑が展開する。しかし、柱穴は全くみられない。第Ⅱ面において、柱穴は調査区東半部に多く確認されており、調査区内における土地利用について示唆的である。 |
| 規模 | 土坑は、遺構の北半が調査区外に及ぶため全容が定かではないが、南北に長軸をもつ不定形気味の平面プランを呈するものと思われる。その規模は、南北が現存長で2.0m、東西の最大幅1.9mである。土坑内は二段掘り状を呈し、深さは0.3~0.9mを測る。一段目は0.3~0.5mで、二段目の掘り込みがある北西に向かい傾斜している。二段目の掘り込みは、調査区外に及ぶため全形が不明であるが、南北が現存長で0.85m、東西幅が0.9mである。最深部の床面は、比較的平坦な状況を呈する。 |
| 礎出土状況 | 土坑内からは5~25cm大の礎が多数出土した。礎は、土坑の東南側から二段掘りの最深部にかけての上層から下層にみられた。あたかも一括投棄されたかのような状況であることから、本土坑が廃棄物処理土坑の性格を有していたことが分かる。 |
| 遺物出土状況 | 遺物は多量の礎に混じる状況で確認された。その量は比較的多く、礎とともに投棄されたものと推定される。 |
| 京都系土師器 模倣土器 | 出土遺物(第113、114図)のうち、460、461は京都系土師器模倣土器である。京都系土師器は手づくね成形であるが、模倣土器は底部に糸切り痕を残すことから、ロクロ成形であったことが分かる。両者とも口縁部内外面に強いナデを施し、体部との堺を明確にし、端部を尖り気味に仕上げる。特に460は全体に丸みをもった器形にしており、京都系土師器の模倣を強く意識していたものと考えられる。特に上面観は、京都系土師器に似た状況である。しかし、京都系土師器の内底面にみられるナデ上げなどは模倣されていない。 |
| 土師質土器 | 462は在地系の土師質土器で、底部に糸切り痕をもつ。小型品で、内湾気味の体部をもつ。内外面とも体部にロクロ痕はみられない。 |
| 京都系土師器 | 463~474は京都系土師器である。いずれも厚手のもので、口縁部付近に強いナデを施す。そのため、口縁端部が尖り気味で外反する。口径によりいくつかに分けられる。463~467は口径9cm前後のものである。467を除き、口縁部周辺のナデの幅は狭く、端部を尖り気味に仕上げ、あまり外反させない。468、469は口径12cm前後のものである。口縁部は外反するが、端部を外方に引き出すようにしているため、上面に平坦面が形成される。470~473は口径13cm前後のものである。いずれも口縁を外反させるが、471は外方に折り曲げたかんじである。474は口径約16cmである。口縁端部は外方に引き出され、上面に平坦面が形成される。以上の京都系土師器は、16世紀後葉~末に位置づけられる。 |
| 瓦質土器 | 475は瓦質土器鉢である。口縁下に強いナデを施すことにより、端部外面の肥厚を強調する。体部外面にはヘラケズリが施される。 |
| 備前焼 | 476は備前焼播鉢である。口縁上端面が内傾する。16世紀前葉に位置づけられる。 |
| 瀬戸・美濃系 | 477は瀬戸・美濃産の天目碗である。 |
| 中国産磁器 | 478、479は中国産磁器である。478は青磁の菊花皿で、形押し成形である。479は景德鎮窯系青花碗で、小野正敏分類の碗D群に相当する。480は備前焼水差の蓋である。 |
| 金属製品 | 481、482は金属製品である。481は鉄製の釘と思われる。先端部を欠くが、頭部の折り返しが観察できる。482は銅製品である。両端が欠損しており全容は不明であるが、径が0.2cmと非常に細いものである。 |
| 土坑の時期 | 本土坑の時期は、16世紀後葉~末に比定されよう。 |



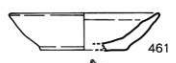
5,000m



第112図 大友75次SK292



460



461



462



463



464



465



466

467

468

469



470

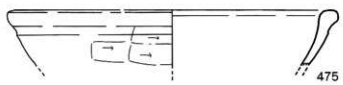
471

472



473

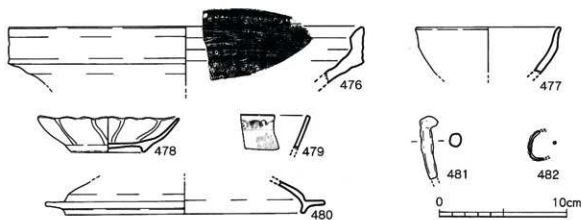
474



475



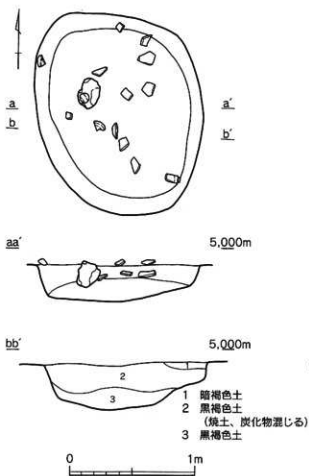
第113図 大友75次SK292出土遺物(1)



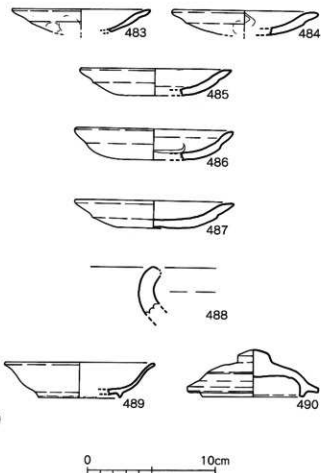
第114図 大友75次SK292出土遺物(2)

(47) SK293

位置と検出面 SK293 (第115図)は調査区北西部のD61区に位置する。第Ⅱ面で検出されたもので、本土坑の至近の場所には他の遺構がない。全体的に密集度が著しい本調査区内にあって、ゆったりとした空間になっている。また、同じ位置の第Ⅲ面からはSK601が確認されている。層位的な関係から、本土



第115図 大友75次SK293



第116図 大友75次SK293出土遺物

坑がSK601に後出する。

規模

土坑は南北に長軸をもつ楕円形基調を呈する。その規模は、南北1.6m、東西1.3mである。深さは0.2~0.3mで、床面は最も深い西半部にむけ緩やかに傾斜する。壁の立ち上がりは、比較的直立気味である。

遺物出土状況

土坑内からは土器片を中心とする遺物が、若干の礫とともに出土した。これらの大半は、2層の黒褐色土からの出土である。2層には焼土や炭化物が混じており、本土坑が火災後の廃棄物処理土坑として使われたことを物語っている。

京都系土師器

出土遺物(第116図)のうち、483~487は京都系土師器である。このうち483は他に比べ、器壁が明らかに薄いもので、口縁部がやや外反気味である。484~487は器壁の厚い一群である。いずれも口縁外面に強いナデが施され、そのため体部との境界に段がつく。483は16世紀中葉、他は16世紀後葉に位置づけられる。

瓦質土器

488は瓦質土器甕である。

489は中国産白磁皿である。

490は青磁で、壺の蓋と思われる。頂部に円形の摘みが付される。外面に貫入のはいった軸が施され、内面は寛胎である。

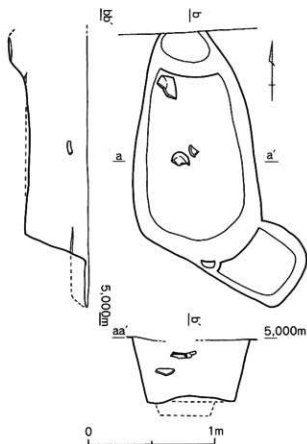
土坑の時期

以上から、本土坑の時期は16世紀後葉に位置づけられる。

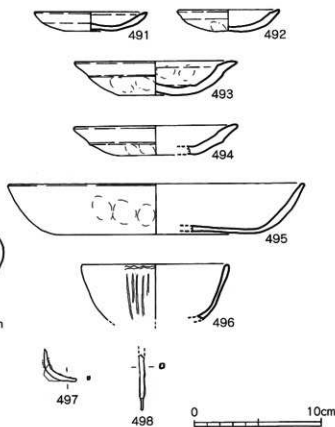
(48) SK294

位置と検出面

SK294(第117図)は第Ⅱ面で検出された。調査区の北側やや西寄りのD61区に位置しており、周辺にはSK185のほか柱穴などがみられる。同位置の第Ⅲ面からは、SK530が検出されており、層位



第117図 大友75次SK294



第118図 大友75次SK294出土遺物

的に本土坑がSK530に後出することが分かる。また、本土坑は北端がわずかに調査区外に及んでいる。

規模 土坑は南側で他遺構と重複しているが、本来は南北方向に長軸を有する楕円形を呈している。その規模は、南北が現存長1.85m、東西の最大幅1.0mである。深さは0.5~0.6mと比較的深く、壁は直立気味に立ち上がる。土坑内は二段掘り状になっており、北端が一段低くなっている。検出面から0.5mで最初の段にたつする。この面は中央がわずかに高い。さらに、二段目が0.1m掘り込まれる。最深部の床面は平坦である。

遺物出土状況 土坑内からは、土器片などの遺物が出土している。いずれも、中層から上層にかけて出土したもので、床面からは遺物は検出されなかった。

京都系土師器 出土遺物(第118図)のうち、491~494は京都系土師器である。いずれも厚手のもので、口径8~9cmのもの(491,492)と口径13cm前後のもの(493,494)がみられる。前者は口縁部が外反せず、端部が尖り気味に仕上げられる。後者は強いナデにより外面口縁下に軽い段が付き、口縁外反する。これらは16世紀後葉~末に位置づけられる。

瓦質土器 495は瓦質土器鉢である。口径に比して器高が低いものである。

青磁 496は中国産青磁碗である。外面に剣先蓮弁文がみられる。

鉄製品 497,498は鉄製の釘である。

土坑の時期 以上から、本土坑の時期は16世紀後葉に比定される。

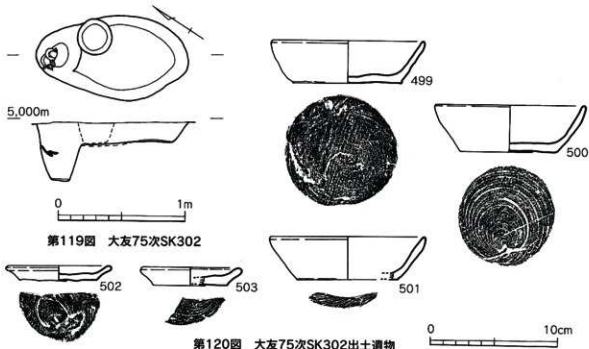
(49) SK302

位置と検出面 SK302(第119図)は中央東寄りのF62区に位置し、第Ⅱ面から検出された。

規模 土坑は楕円形を呈するもので、その規模は長さ1.2m、幅0.65mである。深さは0.15~0.45mで、床面は二段掘り状を呈する。

土師質土器 出土遺物(第120図)のうち、499~501は土師質土器杯である。口径が11~12cmで、体部が斜方向に立ち上がる。502,503は小皿である。両者とも、体部が底部と同じ厚みで斜方向に立ち上がり、外反しながら口縁にいたる。

土坑の時期 以上の土器から、本土坑の時期は14世紀中葉前後に位置づけられる。



第119図 大友75次SK302

第120図 大友75次SK302出土遺物

(50) SK305

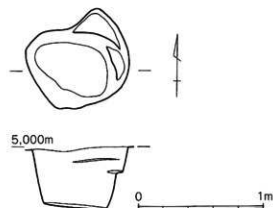
位置と検出面 SK305(第121図)は第Ⅱ面で検出された。調査区中央やや東寄りのF61区に位置している。周辺には、SK197、SK283などの土坑に加え、柱穴が多数みられるが、他遺構との直接的な切り合いはない。

規模 土坑は円形基調の不定形を呈する。その規模は、南北が0.6~0.8m、東西が0.8mである。深さは0.45~0.5mを測り、壁は直立気味に立ち上がる。

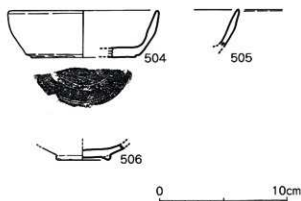
遺物出土状況 土坑内からは最上層で長さ30cmの礫が出土したほか、土器片などの遺物が散発的に出土した。

土師質土器 出土遺物(第122図)のうち、504、505は土師質土器環である。504は、体部が内湾気味に口縁部にいたる。506は吉備系土師器椀底部で、底径4.0~4.3cmを測る。14世紀前葉のものか。

土坑の時期 以上の遺物から、本土坑の時期は14世紀前葉に否定される。



第121図 大友75次SK305



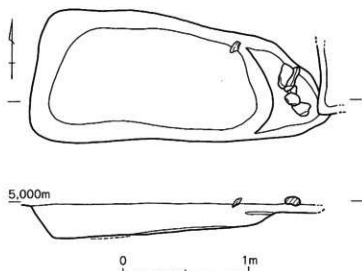
第122図 大友75次SK305出土遺物

(51) SK321

位置と検出面 SK321(第123図)は調査区の西南隅であるD62区に位置しており、第Ⅱ面から検出された。本遺構の周辺には、土坑(SK171、SK269、SK270)や井戸(SE182)がみられ、SK269から切られる。また、同位置の第Ⅲ面からはSK640が確認されており、層的に本土坑がSK640に後出する。

規模 本土坑は、東西方向に長い形態を呈し、その規模は、東西が現存長2.25m、南北が0.8~1.0mである。深さは0.05~0.3mを測る。土坑は二段掘り状を呈し、東端が浅い。床面は東側から西側に傾斜しており、西端が最も深くなる。

土坑内の遺物 土坑内からは目立った出土遺物はなかった。



第123図 大友75次SK321

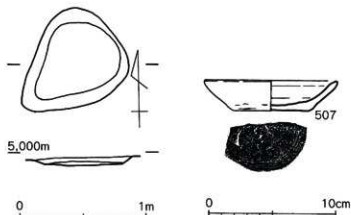
(52) SK323

位置と検出面 SK323 (第124図) は第Ⅱ面において検出された。土坑は調査区西側のD62区に位置する。周辺にはSK130、SK266、SK275、SE170などの大型土坑や井戸がみられるが、本土坑は他遺構とは重複していない。

また、同位置の第Ⅲ面からは不定形土坑であるSK691が確認されている。層位的に、本土坑がSK691に後出することが分かる。

規模 土坑の平面プランは不定形を呈し、その規模は南北0.8m、東西0.8mである。深さは0.05mと非常に浅く、床面は平坦である。土坑内からの遺物の出土は散発的で少量で、破片資料のみである。

土師質土器 出土遺物 (第125図) として、507の土師質土器片がある。口径12.4cmで、体部が斜方向に立ち上がる。時期的には16世紀前半代に比定さる。



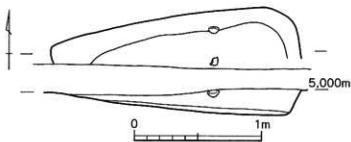
第124図 大友75次SK323

第125図 大友75次SK323
出土遺物

(53) SK400

位置と検出面 SK400 (第126図) はF61区に位置しており、第Ⅱ面で検出された。遺構は水路により南半分が破壊されている。

本遺構の周辺には、SK95やSK133などの土坑や柱穴などが多数みられる。しかし、他遺構との重複関係はない。



第126図 大友75次SK400

規模 土坑は南半分を失うが、東西方向に長軸をもつものであることが分かる。その規模は、東西2.0m、南北が現存長0.2~0.5mである。深さは0~0.2mで、床面は西から東へ傾斜し、東の壁際が最深部となる。

土坑内からの出土遺物は少量で、図示できるものはなかった。

(54) SK414

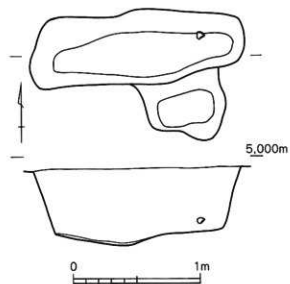
位置と検出面 SK414 (第127図) は調査区東寄りに位置しており、F61・G61にかけてみられる。土坑は第Ⅲ面で確認された。土坑の南側には柱穴や土坑が密集しており、本土坑はSK600と重複しており、これを切る。

規模 土坑は東西方向に長い平面プランを呈しており、その規模は東西が1.7m、南北が0.45~0.6mを測る。深さは0.5~0.6mと比較的深く、壁も直立気味に立ち上がる。床面は緩やかな凹凸がみられ

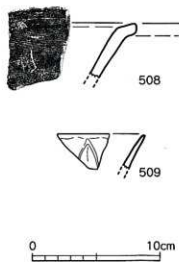
出土遺物

る。土坑内からの遺物の出土は少量で、土器片がわずかに確認されたのみである。

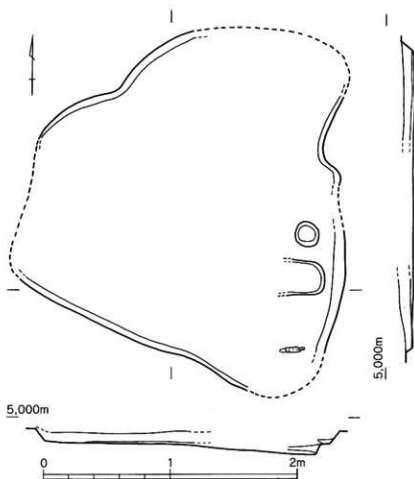
出土遺物（第128図）のうち、508は瓦質土器編である。斜方向に直線的に開く体部から、口縁部が外方に短く折れる。内面には、横方向のハケメが施される。ハケメは体部のみならず、口縁部ま



第127図 大友75次SK414



第128図 大友75次SK414出土遺物



第129図 大友75次SK423

でおよぶ。 時期的には14世紀前半代に位置づけられる。509は青磁碗で、外面に鈎蓮弁文がみられる。本来的には13世紀代に比定されるものである。

土坑の時期 以上から、本土坑は14世紀前半代の所産であると思われる。

(55) SK423

位置と検出面 SK423（第129図）は調査区中央やや東寄りのF61・F62区にかけてみられるもので、第Ⅲ面において検出された。本土坑の周囲からは柱穴が多数確認されたが、土坑などの大型の遺構はみられない。ほぼ同位置の第Ⅱ面からは、SK283が確認されており、層位的にみて、本土坑がSK283に先行する。

規模 本土坑は、不定形を呈する比較的大型のもので、遺構ラインは波うつ部分もある。また、一部の遺構線が不明確であるが、その規模は東西2.65m、南北2.9mである。深さは0.1~0.2mで、床面は西から東に向け傾斜している。

土坑内からは、目立った遺物の出土はなかった。

土坑の時期 良好な出土遺物がなため時期決定ができないが、同位置で本遺構の上層に位置するSK283が14世紀前半代に比定されることから、本遺構は14世紀前半代以前に位置づけられるものと思われる。

(56) SK436

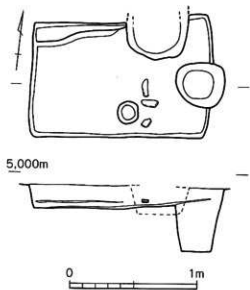
位置と検出面 SK436（第130図）は調査区中央やや東寄りのF62区に位置する。第Ⅲ面から検出されたもので、遺構の周辺には柱穴が多数確認されている。柱穴のいくつかは、本土坑と重複する。また、2m南には大型の竪穴であるSB628がみられる。

同位置の第Ⅱ面では、大型の不定形遺構であるSK153が確認されている。層位的にみて、本遺構はSK153に先行する。

規模 土坑は東西方向に長軸をもつ長方形を呈する。その規模は、東西1.4m、南北0.9~1.0である。深さは0.1~0.2mで、床面は東から西に向かい傾斜している。

出土遺物 土坑内から若干の土器片が出土しているが、図示できるようなものはなかった。

土坑の時期 本土坑の時期を決定する明確な遺物は確認されていないが、同位置で本遺構の上層に位置するSK153が16世紀後葉~末に比定されることから、本遺構はそれ以前に位置づけられるものと思われる。



第130図 大友75次SK436

(57) SK445

位置と検出面 SK445（第131図）は調査区西寄りのD61・D62・E61・E62区にまたがりみられるもので、第Ⅲ面から検出された。本遺構の周辺には、西側にSE445、東側にSK536、SK613、SK660などの大型遺構が確認されている。これらの遺構のうち、本遺構はSK660を切り、SE445とSK613に切られる。また、同位置の第Ⅱ面からは、SK130、SK147、SK204、SK275が検出されている。層位的な関係から、本土坑はこれらの遺構に先行する。

規模

土坑の平面プランは、東西に長い不定形を呈する。北側が水路により破壊され、また西側がSE 445に切られているため全形は不明であるが、現状で東西が3.3m、南北が1.35～1.65mである。深さは0.4～0.7mで、本調査区なかでは比較的深い遺構である。壁については、南側が直立気味に立ち上がるのに対し、東側は緩やかに下っていく感じである。床面は大きく二段からなり、東から階段状に低くなる。最深部の床面の広さは、東西1.7m、南北0.8～1.05mの不定形を呈する。最深部の床面は平坦でなく、中央部が最も深くなる。

遺構出土状況

遺構内からは土師質土器等の遺物が出土した。その多くは破片資料で、下層から上層にかけて出土した。

SK445

出土遺物のうち、SK445の遺構内から出土（第132図）したのは510～523である。

出土遺物
京都系土師器

このうち510～513は京都系土師器である。復元口径12.6～14.6cmで、比較的薄手である。いずれも体部が直線的にのび、口縁部内面がわずかに外反気味になるが、口縁部全体としてはほとんど外反しない。これらは、16世紀前葉から中葉に位置づけられるものである。

瓦器碗

514は瓦器碗の底部である。断面方形で比較的低い高台が、外向きに張る感じで付される。

白磁

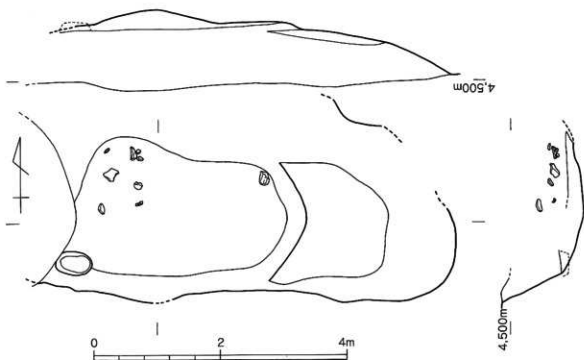
516～520は中国産磁器である。516は白磁碗で、口縁部が玉縁をなす。12世紀前半代のものである。517は白磁皿である。体部のみに釉が施され、見込み部と底部は露胎である。高台は削り出されており、壘付は外方に上がる。体部は斜方向に直線的にのびる。15世紀後半から16世紀前半のものである。

青磁

518は青磁碗の底部である。断面長方形のやや高い高台が付されるもので、15、16世紀に比定される。519、520は青花である。519は漳州窯系の碗で、外面に芭蕉葉文、内面見込み部に草花文が施される。胎土は淡黄色を呈する。520は景德鎮窯系の皿で、外面に唐草文、内面見込み部に玉取獅子が描かれているものと思われる。小野正敏分類の皿B1群に相当する。

石製品

515、521は石製品である。515は復元口径30.6cmの鉢である。高さは13.2cmと、口径に比し器高が低い。底部には長方形の脚が3ヶ所削り出されており、体部は直線的にのびる。器壁は体部が3.6cm、底部が4.0cmである。内面見込み部には、粗いノミ加工の痕跡が残るが、外面は丁寧に仕



第131図 大友75次SK445

上げられている。521は軽石製の有孔円盤で、浮と思われる。半分を欠くものであるが、径4.9cm厚さ1.8cmを測る。重量は現状で、13.8gである。

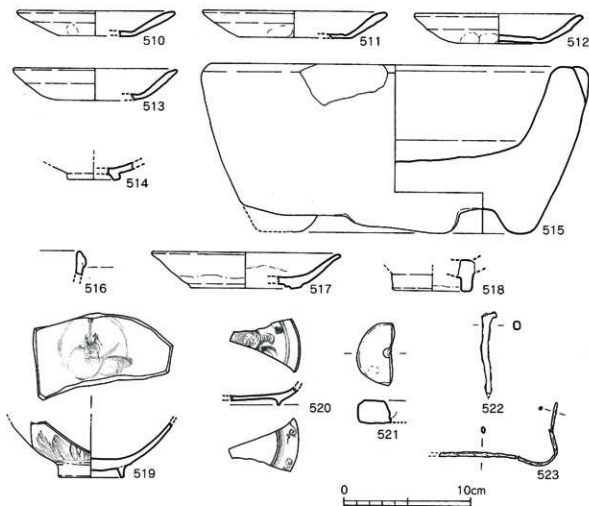
金属製品 522、523は金属製品である。522は鉄製の釘で、頭部が折り曲げられ断面方形である。先端がわずかに欠損するが、現状で長さ6.4cmを測る。二寸釘に相当するものであろう。523は銅製品である。欠損品で折れ曲がっているが、長さ14cmを測る。簪の一部と思われる。

土坑の時期 SK445の時期について、層的な他遺構との関係からみると、同位置の第Ⅱ面で確認されたSK130、SK147、SK204、SK275がいずれも16世紀後葉以降であることから、下層の第Ⅲ面で検出されたSK445は16世紀後葉以前に位置づけられるものと思われる。出土遺物から比定される16世紀中葉とも矛盾しない。

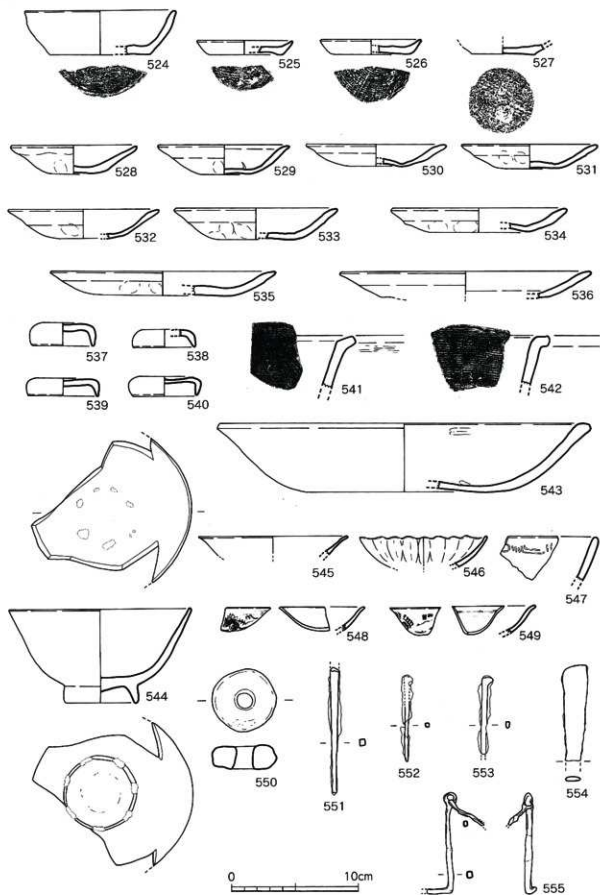
SK445周辺 SK445及びSE445周辺から出土し、帰属が明らかでない遺物(第133図)を紹介する。

出土遺物 524~527は、底部糸切りがみられる在地系の土師質土器である。このうち524は坏である。体部の立ち上がりはシャープで、内湾気味の体部である。525、526は小皿である。短い体部が直立気味に立ち上がるもので、口縁部が尖る。524~526は14世紀代に位置づけられる。527は内底面にクロロ痕が残ることから、体部にクロロ痕がみられる坏であると思われる。16世紀代のものである。

京都系土師器 528~536は京都系土師器で、全体に器壁は比較的薄手である。528、529は復元口径10cm程のものであるが、口径に比し器高が2.3cmと高いため、椀状の器形を呈する。530、531は復元口径11cm程のものである。器高は1.7cm、1.9cmと低く、共に上げ底状を呈する。532、533は復元口径12~



第132図 大友75次SK445出土遺物



第133图 大友75次SK445及びSE445周辺出土遺物

13cmのものである。これらについては、器高が2.3cm、2.5cmとやや高い。534は復元口径14cmを測るものであるが、器高は1.9cmと低い。底部は上げ底状を呈する。535は復元口径18cm、536は復元口径20cmを各々測る。以上の京都系土師器は16世紀前葉から中葉に位置づけられる。

537～540は手づくねの土師器焼塩壺の蓋である。いずれも口径5cm程である。これらについては、皿の可能性もある。

瓦質土器 541～543は瓦質土器である。541、542は14世紀代の鍋である。541は口縁部が短く外方に折れる。内面と外面の一部に横方向のハケメがみられる。542も541と同様な器形を呈するが、口縁部の折れが541の斜めに対し、短く直角に折れる。内面には横方向のハケメが施される。543は鉢である。復元口径29.6cmに比し、器高が5.4cmと低い。体部は丸みをもち緩やかに対上り、直線的に口縁部にいたる。口縁部端部は丸く仕上げられる。16世紀代のものであろう。

朝鮮王朝産 544は朝鮮王朝産白磁碗である。高台は高く、体部は腰があまり張らず直線的に口縁にいたる。復元口径は14.4cmである。見込みと高台下面に目積み痕がみられる。

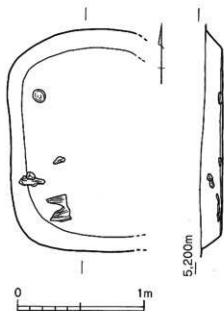
白磁 545～549は中国産磁器である。545は白磁皿で、口縁部がわずかに外反する。546は青磁菊花皿である。545、546とも16世紀代の所産である。547は青磁碗で、口縁外面に雷文がみられる。15世紀代のものである。548、549は景德鎮窯系青花である。いずれも小野分類の皿B1群に相当するもので、外面に牡丹唐草文がみられる。16世紀前半までに主体があるものである。

石製品 550は軽石製の有孔円盤である。浮と思われ、径5.1cm、厚さ1.9cm、孔径1.5cm、重量25.5gである。

金属製品 551～555は金属製品である。551～553は鉄製の釘で、いずれも頭部を折り曲げ、断面方形を呈する。551は頭部と先端部を欠くが、現存長10.1cmを測る。552は長さ6.9cmで、三寸釘に相当する。553は先端部欠くが、現存長6.2cmを測り、本来は三寸釘に相当するものか。554は器種不明鉄器。555は鉄製の器種不明品であるが、L字状に曲がった先に環状の部分が付き、環状の部分と同様な部品とつながる。

(58) SK460

位置と検出面 SK460(第134図)調査区東南隅のG63区に位置する。第II面から検出されたもので、周辺にはSK048などがみられる。



第134図 大友75次SK460

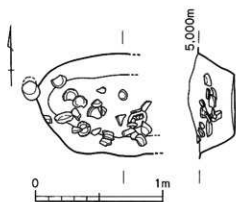


第135図 大友75次SK460出土遺物

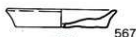
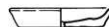
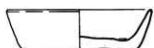
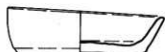
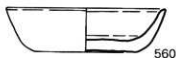
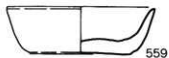
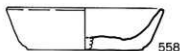
| | |
|-------|--|
| 規模 | 土坑は東側の遺構線が不明確であるが、南北に長い長方形を呈する。その規模は、南北が1.75m、東西が現存長1.0mである。深さは0.15mと比較的浅く、壁は斜方向に立ち上がる。床面は平坦である。 |
| 骨片 | 土坑内南西隅からは、骨片と木片が検出された。骨片は残存状態が良好でないため、部位等の詳細は不明である。木片についても部分的な残存のため、全容は不明である。北西隅の床面からは、京都系土師器の完形品が1個体出土した。土坑の形状に加え、骨片や副葬品と推測される土器の出土を考えた場合、本土坑は墓である可能性が高い。その場合、副葬品の位置などから、頭位を北にする埋葬であったことが考えられる。また、出土の木片が木棺の一部であるとすれば、釘が全く出土していないことから、組み合わせ式の木棺であったと推測される。 |
| 墓の可能性 | |
| 出土遺物 | 出土遺物(第135図)は京都系土師器1点のみである。556は京都系土師器で、口径8.0cmの小型品である。丸みをもった形状で、口縁端部の外側がつまみ出される。 |
| 土坑の時期 | 本土坑の時期は、出土土器から16世紀後葉に位置づけられる。同位置の第Ⅰ面からは、第2南北大路に伴う側溝が確認されている。本土坑が層位的に側溝以前のものであることから、第Ⅰ面で検出された側溝築造の上限が本土坑の時期になると思われる。 |

(59) SK461

| | |
|-------------|--|
| 位置と検出面 | SK461(第136図)は第Ⅱ面で検出された。調査区の東北隅のG61区に位置し、東半を攪乱により破壊されている。本遺構の周辺では、第Ⅰ面で確認されている攪乱のため、遺構の残存状況が悪く目立った遺構はみられない。また、同位置の第Ⅰ面からは、第2南北大路の側溝と考えるSD212が検出されているが、本遺構はSD212に先行するものである。 |
| 規模 | 土坑は東西に長い形状を呈していたと思われるが、攪乱のため全容は不明である。その規模は、南北0.8m、東西が現存長0.9mを測る。深さは0.3~0.4mで、壁は直立気味に立つ。また、床面は平坦である。 |
| 遺物出土状況 | 土坑内からは、土師質土器がまとまって出土した。土器は完形品を含むもので、中層から上層にかけて廃棄された状況で確認された。出土状況から、これらの土器は一括性の高い一群としてとらえられる。 |
| 出土遺物 | 出土遺物(第137図)は土師質土器環と小皿がある。いずれも底部に糸切り難しがみられる在産品のものである。 |
| 土師質土器環 | 557~564は環である。このうち557は口径に比し器高が低いタイプで、他に比べ低平な印象を受ける。口径12.9cmに対し、器高は2.8~3.1cmである。体部は斜め方向に立ち上がり、直線的に口縁部にいたる。 558~563は口径に比し器高が低い一群で、前述の557に比べると深い印象を受ける。口径11.4~12.4cm、器高3.1~4.0で、口径が縮小し、器高が高くなっているのが分かる。体部の立ち上がりも、557に比べ急になる。このため、口径と底径の差が557よりも小さくなる。 564は、器高が高く、口径と底径の差が著しいタイプである。口径13.2cm、器高3.6cm、底径7.2cmを測る。体部は、底部から斜方向に直線的に口縁部に伸びるもので、前述2タイプとは全く異なった印象をもつ。 |
| 土師質土器 小皿 | 565~568は小皿である。口径8.1~9.0cm、底径6.8~7.2cm、高さ1.2~1.5cmを測る。いずれも底部から直線的に体部を引き上げるもので、口縁端部が尖り気味である。 |
| 土坑の時期 | 以上の土器から、本土坑の時期は14世紀中葉前後に位置づけられる。 |



第136图 大友75次SK461



第137图 大友75次SK461出土遺物

(60) SK474

位置と検出面 SK474 (第138図) は調査区東寄りのG61・G62区に位置する。第Ⅱ面から検出されたもので、東半は攪乱により破壊されている。本土坑の周辺には小土坑や柱穴などが多数みられ、本土坑も一部の柱穴に切られる。

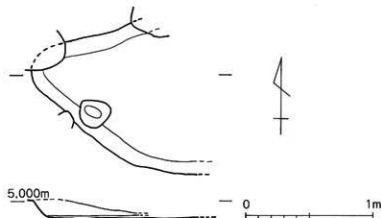
規模 遺構は東西に長い不定形を呈するものと推測されるが、東半部が不明なため、全容は定かではない。その規模は、南北1.2m、東西が現存長1.3mである。深さは0.15mで比較的浅い。また、床面は平坦である。

遺物出土状況 遺構内からの遺物の出土は少量あった。

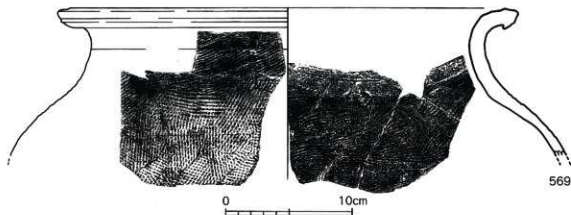
出土遺物(第139図)

として569の須恵器甕がある。口縁部が大きく外反するもので、体部外面に平行タタキがみられる。東播系のもと思われる、本遺構の時期は、14世紀代に比定される。

東播系要
土坑の時期



第138図 大友75次SK474



第139図 大友75次SK474出土遺物

(61) SK524

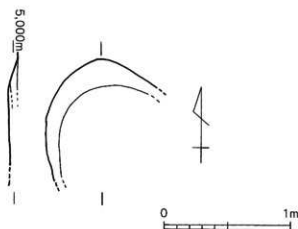
位置と検出面 SK524 (第140図) は調査区東北部のG61区に位置する。第Ⅱ面において検出されたもので、上層からの攪乱により大きく破壊されている。同位置の上層である第Ⅰ面からは、第2南北大路の側溝であるSD212が検出されている。

位置 土坑は失われている部分が多く、全形は不明である。その規模は、現状で南北0.95、東西0.9mを測る。深さは0.05mと比較的浅く、床面は平坦である。

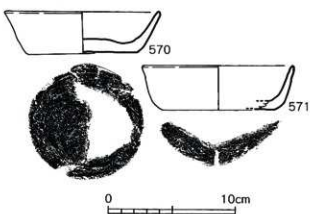
遺物出土状況 土坑内からは土器片などが散発的に出土した。

土師質土器環 出土遺物(第141図)には、570、571の土師質土器環がある。いずれも底部糸切り離して、在地産のものである。口径11.8~12.2cm、器高3.4~3.5cmを測る。

土坑の時期 以上から、土坑の時期は14世紀中葉前後に位置づけられる。



第140図 大友75次SK524



第141図 大友75次SK524出土遺物

(62) SK527

位置と検出面

SK527 (第142図) は調査区東端のG62区に位置するもので、第II面から検出された。

規模

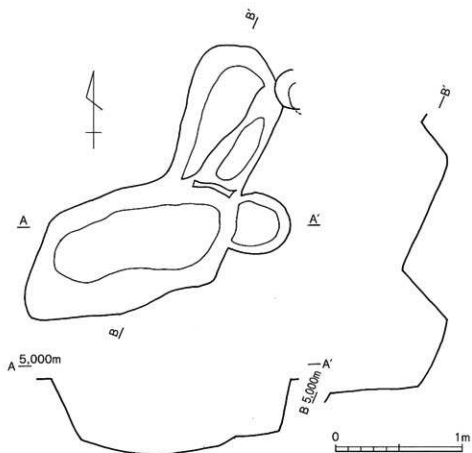
土坑はL字形を呈するものであるが、複数の土坑が重複している可能性をもつ。規模は南北1.9m、東西1.6mである。深さは0.4~0.7mを測る。土坑内からは、土器片が散発的に出土した。

出土遺物

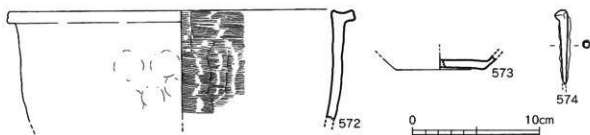
出土遺物(第143図)のうち、572は瓦質土器鍋で、外面に鈔が付くものである。鈔は最上部に付されるが、比較的高いものである。573は中国産白磁口禿げ皿底部、574は鉄製釘である。

土坑の時期

以上から、土坑の時期は14世紀前半代に位置づけられる。



第142図 大友75次SK527

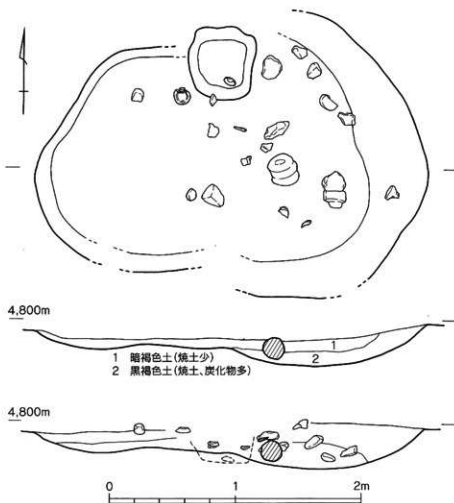


第143図 大友75次SK527出土遺物

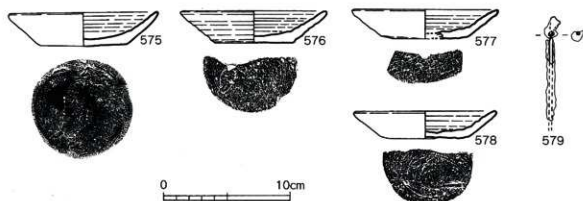
(63) SK530

位置と検出面 SK530 (第144図) は調査区西北部のD61区に位置する。第Ⅲ面で検出されたもので、周辺にはSK570、SK583、SK700などの大型遺構がみられる。本遺構はSK700と重複しており、これを切る。同位置の第Ⅱ面では、SK185やSK244が確認されている。本土坑は、層位的にこれらに先行する。

規模 土坑は、一部遺構ラインが不明確な部分もあるが、東西方向に長い不定形を呈する。その規模は、東西3.1m、南北1.8~2.25mを測る。深さは0.2~0.4mで、壁は緩やかに立ち上がる。床面には起伏がみられ、西から東に向かい傾斜している。



第144図 大友75次SK530



第145図 大友75次SK530出土遺物(1)

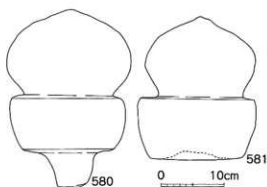
土坑内の状況 土坑内には焼土や炭化物の堆積がみられ、下層ほど顕著である。また、土器や五輪塔などの遺物が下層から上層にかけて確認された。本土坑は火災後の廃棄物処理土坑と考えられる。

土師質土器 出土遺物(第145、146図)のうち、575～578は底部に糸切り痕を残す在地産の土師質土器である。口径11.1～11.9cm、器高2.1～2.6cmを測るものである。体部は、斜方向に直線的にのび、内面のみロクロ痕を残すもの(575、577、578)と内外面にロクロ痕を残すもの(576)がある。これらは16世紀初～前葉に位置づけられる。

鉄製釘 579は鉄製の釘で、頭部を折り曲げ、断面方形を呈するものである。先端部を欠くが、現存長8.0cmを測る。本来的には三寸釘に相当するものであろう。

五輪塔 580、581は五輪塔空風輪部で、いずれも凝灰岩製である。

本土坑の時期 以上から、本土坑の時期は16世紀初～前葉に比定される。



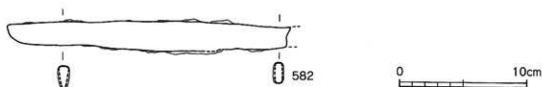
第146図 大友75次SK530出土遺物(2)

(64) SK536

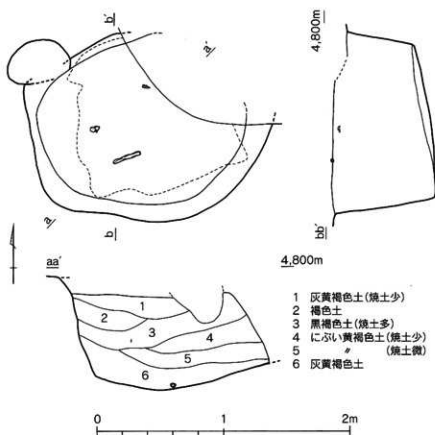
位置と検出面 SK536(第148図)は第Ⅲ面で検出されたもので、調査区中央付近のE61区に位置する。

規模 土坑は、一部が上層の遺構に切られ全形が不明であるが、円形基調を呈するものと思われる。その規模は現状で、南北1.5m、東西1.95mを測る。深さは0.5～0.6mで、床面は北から南に向かい深くなる。埋土中には焼土が多量に含まれる層があり、本遺構が火災後の廃棄物処理土坑であったことが分かる。遺物の出土は散発的で、時期を決定できるものはなかった。

出土遺物 出土遺物(第147図)のうち、582は鉄製の刀子で、基部を欠く。



第147図 大友75次SK536出土遺物

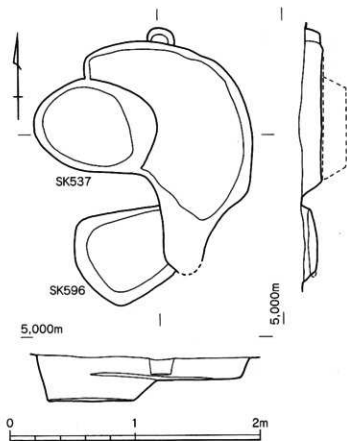


第148図 大友75次SK536

(65) SK537・SK596

SK537 (第149図) は
位置と検出面 第三面で検出された。F
62・G62区に位置し、SK
596を切る。土坑は、不
規模 定形を呈し、東西1.7m、
南北1.8mである。深さ
は0.1~0.4mである。土
坑内から目立った出土遺
物はなかった。

SK596 (第149図) はSK
位置と検出面 537に切られる。全形は
不明であるが、楕円形基
規模 調を呈する。規模は、長
軸が現存長で0.75m、短
軸0.75m、深さ0.1mで
ある。土坑内からは、目
立った出土遺物はなかつ
た。



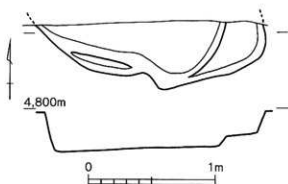
第149図 大友75次SK537,SK596

(66) SK574

位置と検出面 SK574 (第150図)は調査区北東隅のF60区に位置する。第Ⅲ面で検出されたが、北半は調査区外に及ぶため全容は不明である。

規模 土坑は東西に長い不定形を呈するもので、その規模は現存長で、東西1.8m、南北0.55mである。深さは0.2~0.3mで、二段掘り状を呈する。

遺物出土状況 土坑内からは目立った遺物の出土はなく、時期は不明である。



第150図 大友75次SK574

(67) SK583

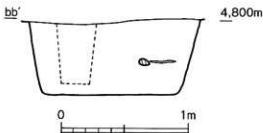
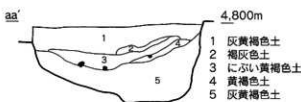
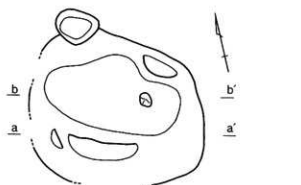
位置と検出面 SK583 (第152図)は調査区北側のD61・E61に位置する。第Ⅲ面で検出されたもので、周辺にはSK530、SK700などがみられる。

規模 土坑は不定形を呈し、東西方向の長軸が1.4m、南北が1.2mを測る。深さは0.6mで、床面は平坦である。

遺物出土状況 土坑内からの出土遺物は少量で、散發的であった。

出土遺物 出土遺物 (第151図)のうち、583は瓦質土器鍋である。直線的な体部から口縁部が短く外方に折れる。内面には横不方向のハケメが施される。

土坑の時期 土坑の時期は14世紀前半代である。



第151図 大友75次SK583出土遺物

第152図 大友75次SK583

(68) SK584

位置と検出面 SK584 (第153図)は調査区北西隅のC61区に位置するもので、第Ⅲ面で検出された。同位置の第Ⅱ面からはSK205が確認されているが、層位的に本土坑がSK205に先行する。

規模 土坑の平面プランは楕円形を呈する。南北方向に長軸を有するもので、その規模は南北2.2m、東西1.7mである。深さは0.6mと比較的深い。壁は床面から斜方向に立ち上がり、床面は平坦である。

遺物出土状況 土坑内からの遺物出土は散発的で、破片資料が大半をしめる。また、出土状況についても、その多くが下層から上層にかけて出土している。

京都系土師器 出土遺物（第154図）のうち、584、585は京都系土師器である。584は器壁が薄いもので、復元口径15.0cmを測る。体部は直線的に口縁部にいたり、ほとんど外反しない。585は復元口径12.0cmを測るもので、器壁が厚く、強いねでにより口縁部が外反する。584が16世紀中葉に、585が16世紀後葉～末に比定される。

瓦質土器 586は瓦質土器の鍋と思われる。直線的な体部から、口縁部が短く外方に折れるものである、14世紀代に比定される。

東播系 587、588は須恵器こね鉢の口縁部である。両者とも東播系のものである。

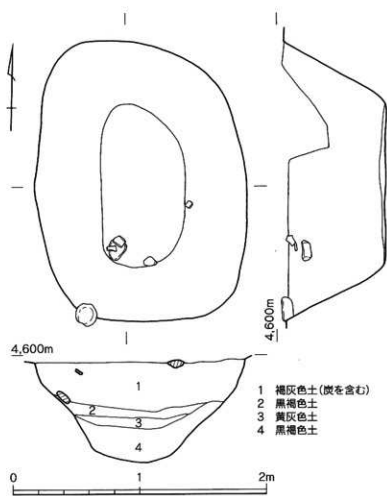
備前焼 589は焼締陶器備前焼播鉢の口縁部である。口縁外面に凹縁がみられ、口縁端部上面が内傾する。16世紀前葉から中葉のものか。

青磁 590は中国産青磁碗の底部である。

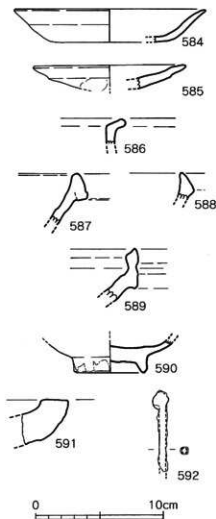
茶臼 591は茶臼の下臼で、石材は安山岩と思われる。外面はやや雑な仕上げであるが、内面は丁寧に仕上げられている。

鉄製釘 592は鉄製の釘である。頭部を折り曲げ、断面方形を呈するものであるが、先端部を欠く。現存長が6.5cmである。

土坑の時期 以上から、本土坑の時期は16世紀後葉～末に位置づけられる。



第153図 大友75次SK584



第154図 大友75次SK584出土遺物

(69) SK592

位置と検出面

SK592 (第155図) は中央や東寄りのF62区に位置し、第Ⅲ面から検出された。同位置の第Ⅱ面では、大型の不定形土坑であるSK153が確認されている。層位的に、本土坑がSK153に先行する。

規模

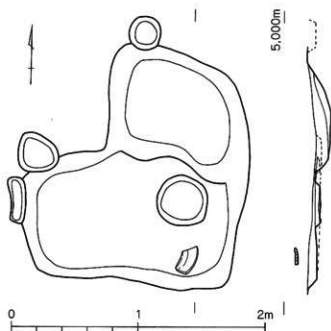
土坑は逆L字状の平面形を呈する。東西1.7m、南北1.9mの規模である。深さは0.05~0.15mで、二段掘り状を呈する。

遺物出土状況

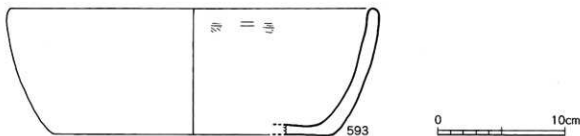
土坑内からは土器片が少数出土したのみである。

出土遺物

出土遺物 (第156図) のうち593は瓦質土器鉢である。16世紀代のものか。



第155図 大友75次SK592



第156図 大友75次SK592出土遺物

(70) SK601

位置と検出面

SK601 (第157図) は調査区北西隅のD61区に位置する。第Ⅲ面から検出されたもので、北側は調査区外に及ぶ。本遺構の周辺には土坑が密集しており、これらが複雑に重複する。SK601はこれら重複する土坑をすべて切っている。

また、本土坑と同位置の第Ⅱ面では、SK293が確認されている。SK293は16世紀後葉以降に位置づけられるものである。本遺構は層位的にSK293に先行する。

規模

SK601は、北側が調査区に及ぶため全形は不明であるが、長軸を南北方向にもつ楕円形基調を呈するものと思われる。その規模は、南北方向が現存長2.6m、東西方向が2.3mである。深さは、0.7~0.85mと比較的深い。壁は直立気味に立ち上がる。床面はほぼ平坦であるが、南から北方向に、あるいは東から西方向に向かい緩やかに傾斜している。

層位

本土坑の埋土は4層に分層できる。最上層の第1層は、0.3~0.4mの褐色土層で、ほぼ水平堆積している。第2層の黄灰色土層は0.1~0.4mで、東から西の方向へ流入していることが分かる。第3層は黒褐色土層で0.05~0.25mの厚さをもつ。第2層同様に東から西に向かい土が流れ込んでいる。第3層には、炭化物が多く含まれると、土師質土器や礫もこの層から確認される。第4層は最下層で暗褐色土を呈する。0.05~0.1mの厚さで、礫が含まれる。

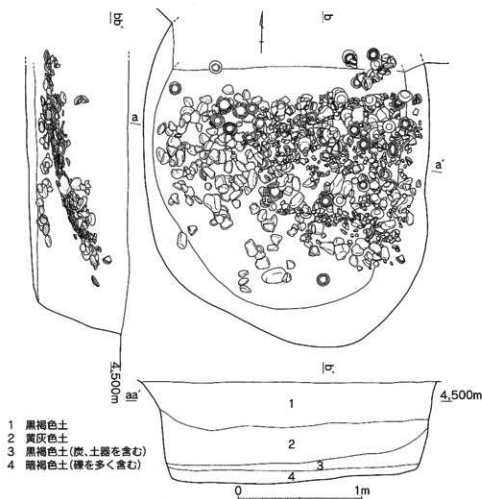
遺物出土状況 土坑内からは、多数の土師質土器と礫が出土した。これらは、大きく上下2層に分かれて出土することが確認されている。下層にみられるのは、第4層に含まれる礫である。礫は0.05~0.2m大の大きさで、ほぼ床面直上から出土する。これらの礫は、床面全体から散発的にみられる。一方、上層の土師質土器と礫は、第3層に含まれるものである。礫は下層の礫と同様に0.05~0.2m大のもので、これら礫とともに土師質土器が多数確認されている。土師質土器は90個体程あり、その多くが完形品である。第3層に含まれる礫と土師質土器は、本土坑が一定程度埋没した段階に、南東方向から北西方向に向けて一括廃棄された様が観察できる。すなわち、南東方向から礫と土師質土器の層は大きく斜めに堆積し、土坑の中央付近で第4層の礫と接する。

一括投棄土器 以上の土師質土器は、ほとんどは完形品であることから、儀礼などに使用された後に一括投棄されたものと想定され、その一括性は非常に高い。

出土遺物 出土遺物(第158~163図)は土師質土器のほか瓦質土器、備前焼、中国産磁器、石製品、金属製品などがみられる。

土師質土器 土師質土器のうち主体を閉めるのは、底部糸切りのもの(594~695)である。これらの中で、主体をなすのが、体部内面にロクロ痕がみられる一群(594~680)である。これらには法量分化が認められ、大きく3法量が確認される。すなわち、I群：口径10.5cm前後のもの、II群：口径12cm前後のもの、III群：口径4cm前後のものである。

I群 I群には、594~623が相当する。これらの口径をさらに詳しくみると、9.8~11.0cmのもの



第157図 大友75次SK601

があり、10.5cm前後のものが圧倒的に多いことが分かる。器形的にみると、体部の立ち上がりは、底部と同じ厚みで引き上げられるのが主である。なかに、底部が円盤状を呈し、底部と体部の堺が明瞭なもの(619)もみられる。このほか、底部が丸底状を呈するもの(607、621)もみられる。体部は、わずかに内湾気味のものが多く、直線的なものも認められる。ロクロ痕は、体部外面にはみられず、基本的に体部内面だけに残る。多くが口縁部近くや上半まで及ぶが、なかに体部中程以下までに留まるもの(611、613)もある。また、口縁端部を中心に、一部内面にかけてスス状炭化物が顕著に付着したもの(596、602、615)がある。これらは、灯火器として使用されたものであろう。

II群 II群は624~664で、口径12cm前後にピークをもつ。器形的にはI群と同様に、底部と同じ厚みの体部が引き上げられるものが多い。少数ではあるが、円盤状の底部をもつもの(627、629、646、648)、丸底状のもの(631、640)などがみられる。体部は直線的なものが多いが、なかに外反気味のものも認められる。体部のロクロ痕は、内面のみに残るものが主体をしめるが、内外面にみられるもの(624~631)もある。また、口縁部等にスス状のものが付着するもの(624、637、643、644、647、655、662)も多い。

III群 III群は665~680で、口径14cm余にピークをもつ。やはり円盤状の底部を有するもの(666、669)が少数みられる。体部は外反気味のものが多くなる。なかに、口縁部周辺に強いナデを施すことにより、口縁部が短く外反するものがみられる。体部のロクロ痕は内面のみに残るものが主体をしめ、ロクロ痕は口縁部付近まで及ぶものが多い。

I~III群は16世紀前葉に位置づけられる。

IV群 以上のI~III群と色調、ロクロ痕、器形が異なる681~695をIV群とする。色調は、I~III群が赤褐色であるのに対し褐色を呈する。ロクロ痕はユビによるものと思われ、I~III群の工具を用いたと推定されるロクロ痕より太い。ロクロ痕は外面にみられ、多くは下半のみである。口径はI群とほぼ同じであるが、器高がI群よりも0.5cm程高い。IV群はI~III群と生産地が異なると推測される。

大内系 696~700は手づくね成形によるものである。このうち696は白色を呈し、内外面にロクロ痕を明瞭に残すものである。体部は斜方向に直線的に伸びる。大内氏の用いる土器群との関連が考えられる。

京都系土師器 697~700は京都系土師器である。このうち、698~700は器壁の薄いものである。698は口縁端部を上方向につまみ出す。また、699の口縁部には、スス状の炭化物の付着がみられる。灯火器として利用されたものであろう。

耳皿 701~703は土師質土器耳皿である。いずれも底部糸切りの完形品で、色調はI~III群と同様である。

瓦質土器 705~708は瓦質土器である。704は襷鉢で、内面には横方向のハケメがみられる。705、706~708は鍋である。このうち705は16世紀代のもので、他は14世紀代に比定される。

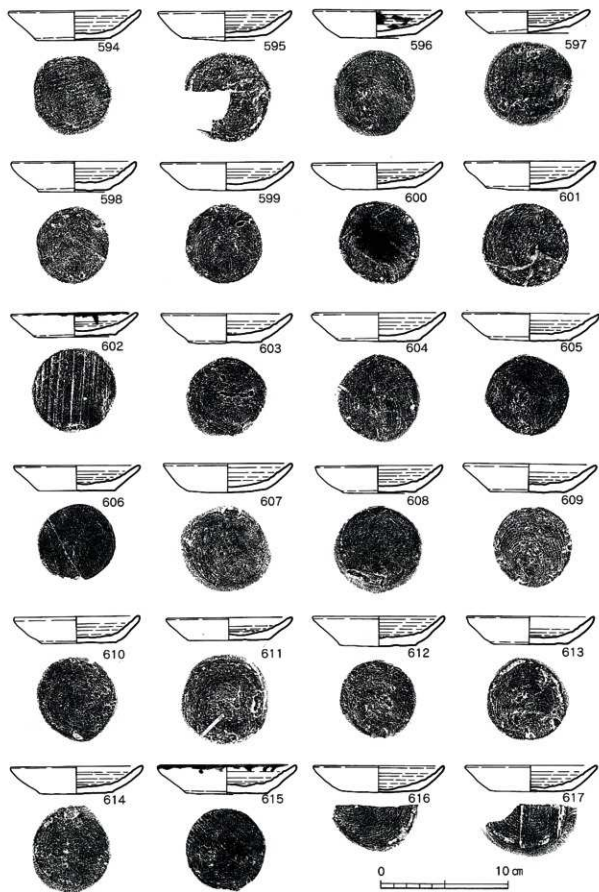
備前焼 709は瓦質土器甕である。

中国産磁器 710~712は中国産の磁器である。710は青磁碗の口縁部で、15、16世紀代のもの。711も青磁碗の底部で、断面三角形の高台が付される。712は白磁の小坏である。

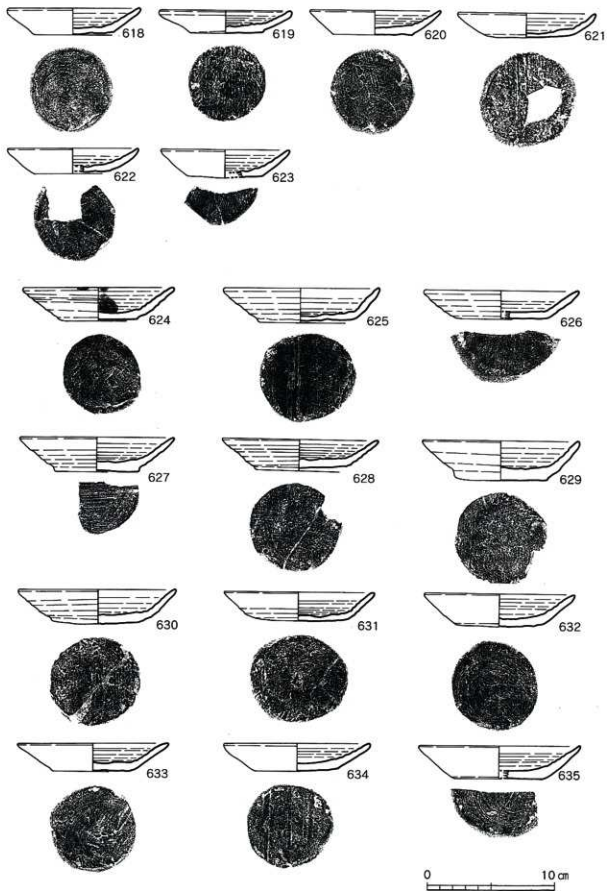
713は砥石である。長方形を呈する小型品であるが、欠損している。

砥石 714~718は鉄製の釘である。著しく欠損したものが多いが、いずれも頭部を折り曲げ、断面方形をなすものと思われる。

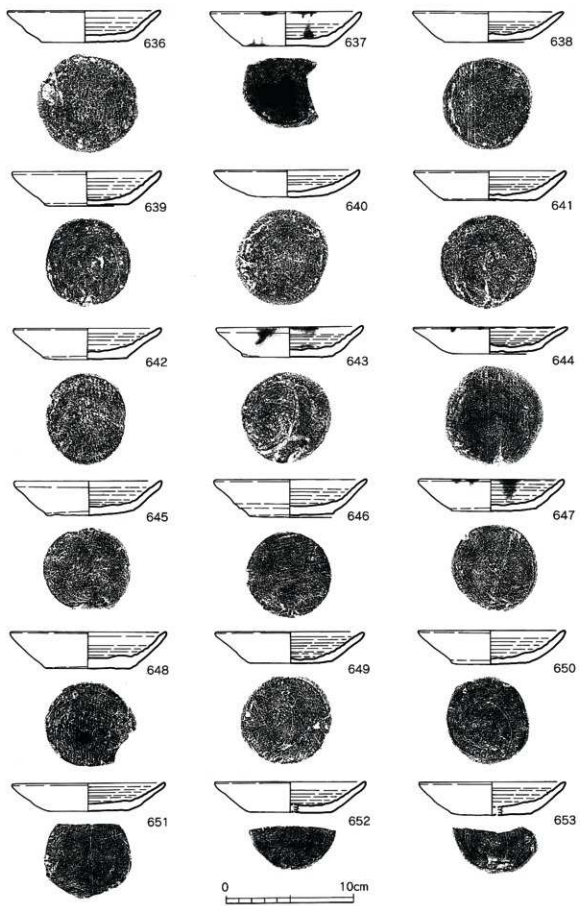
遺構の時期 以上の遺物から、本遺構の時期は16世紀前葉に位置づけられる。



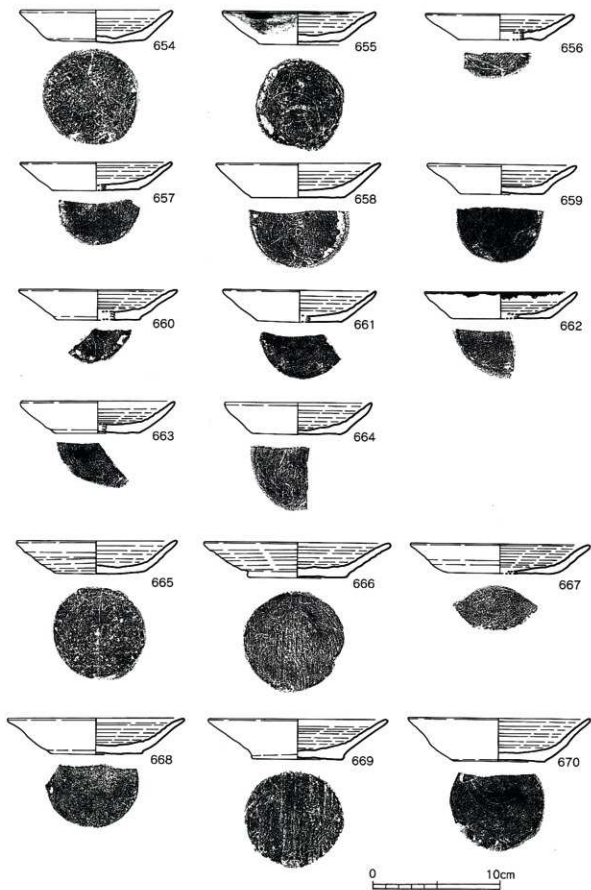
第158图 大友75次SK601出土遺物(1)



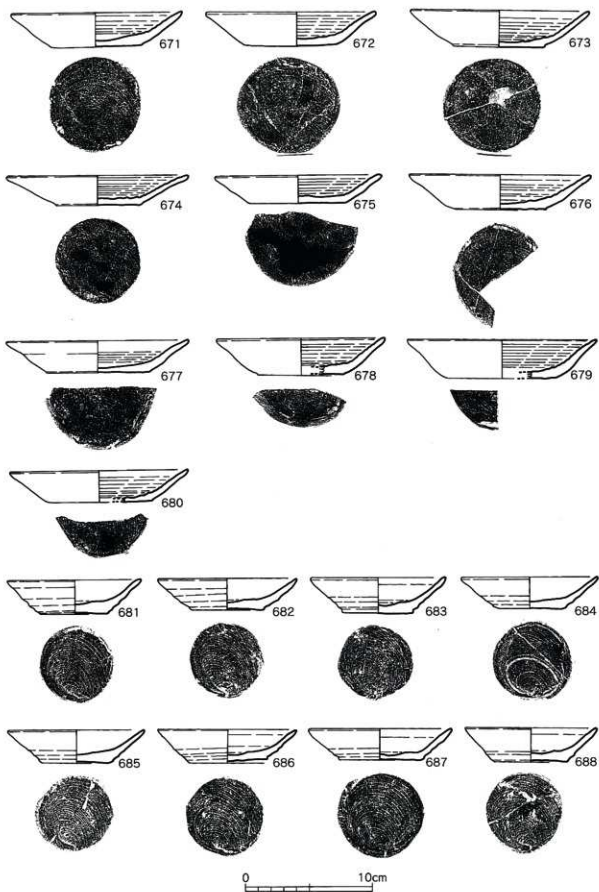
第159圖 大友75次SK601出土遺物(2)



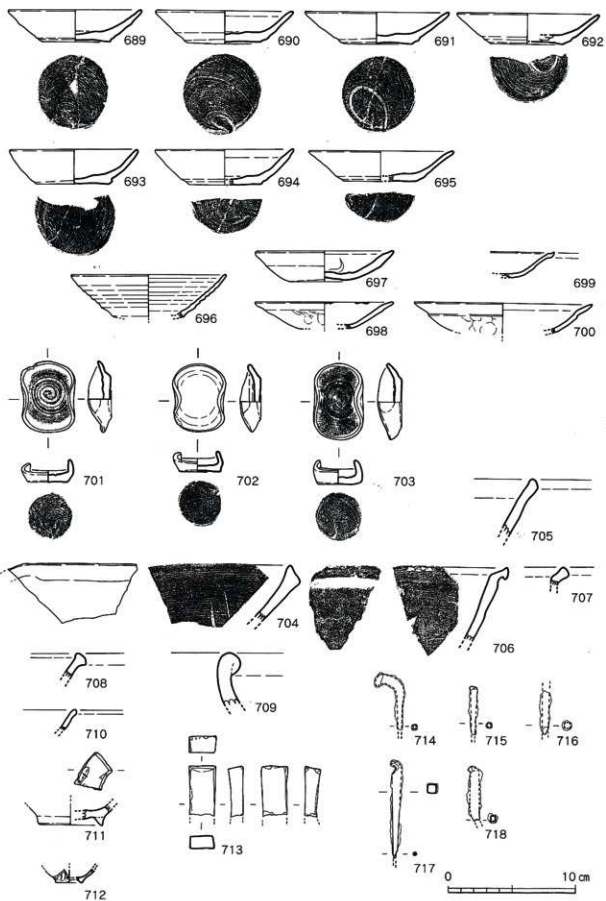
第160图 大友75次SK601出土遺物(3)



第161图 大友75次SK601出土遺物(4)



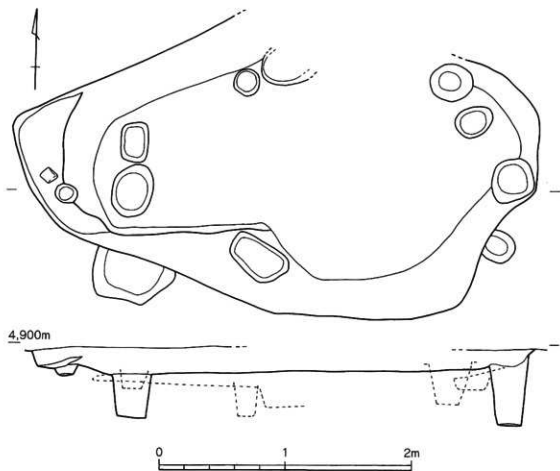
第162図 大友75次SK601出土遺物(5)



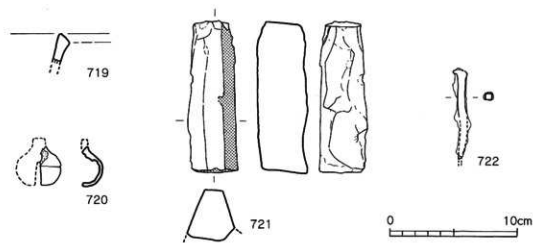
第163图 大友75次SK601出土遺物(6)

(71) SK602

位置と検出面 SK602 (第164図) は、調査区中央やや西寄りのE62区に位置する。第Ⅲ面から検出されたもので、周辺にはSK631やSD804などの遺構がみられる。これらの遺構とは直接重複しないが、いくつかの柱穴と重複する。また、同位置の第Ⅱ面ではSK191とSE149が確認されている。本土坑は、層位的にこれらの遺構に先行する。



第164図 大友75次SK602

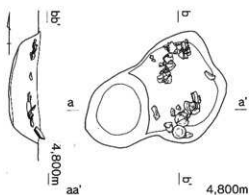


第165図 大友75次SK602出土遺物

| | |
|--------|--|
| 規模 | 本土坑は、上層遺構により一部が切られているため全形は不明であるが、東西方向に長い不定形を呈する。その規模は、東西4.1m、南北1.5～2.5mである。深さは0.15～0.2mと比較的浅い、壁の立ち上がりは緩やかで、斜方向に立ち上がる。床面は平坦である。 |
| 遺物出土状況 | 土坑からの出土遺物は少数で散発的な状況である。また、礫などの出土も認められない。遺構の規模に比べ、遺物量は非常に少ない。 出土遺物（第165図）には、土器のほかに土製品や鉄製品がある。 |
| 備前焼 | 719は焼締陶器備前焼の挿鉢である。口縁部は、体部に比べ端部が上下にやや肥厚する。口縁端部は角張る形状をなす。 |
| 土製鈴 | 720は土製の鈴である。破片資料であるが、最大径は3.4cmに復元できる。上半と下半を併せて作られている。 |
| 石製未製品 | 721は石製品の未製品である。赤褐色を呈する輝緑凝灰岩と思われる石材で、鑿状工具による切断面が残る。 |
| 鉄製釘 | 722は鉄製の釘である。頭部が折り曲げられ、断面方形を呈するものである。先端部を欠損するが、現存長7.2cmを測る。 |
| 遺構の時期 | 以上の遺物からは、遺構の時期を特定できないが、同位置の上層である第Ⅱ面で確認されたSK191とSE149が16世紀後葉～末に位置づけられていることから、本遺構はそれよりも古い時期に比定されるものと思われる。 |

(72) SK613

| | |
|--------|---|
| 位置と検出面 | SK613（第166図）は調査区中央やや西寄りのD61・E61区に位置する。第Ⅲ面から検出されたもので、周辺にはSK445、SK536、SK660などの土坑がみられる。同位置の第Ⅱ面からは、SK147が確認されているが、層的に本土坑が先行する。 |
| 規模 | 平面プランは不定形を呈する。その規模は、長軸1.2m、幅0.55～0.8m、深さ0.2～0.45mを測る。土坑は二段掘り状を呈し、東側が浅く、西側が深い。東側の上段部分では、壁の立ち上がりが東側では急で、北と南側では緩やかである。床面は中央部が緩やかに窪む。西側の下段部分は、壁の立ち上がりは急で、床面は平坦である。 |
| 遺物出土状況 | 土坑内の東側上段部からは、土師質土器がまとまって出土した。これらはすべて土師質土器環で、中層から上層にかけてレンズ状に検出された。土坑が一定程度埋没した段階で、一括投棄されたものと推定される。 |
| 土師質土器環 | 出土遺物（第167図）は土師質土器環である。これらの口径は11.0～13.2cmで、12cm前後にピークがある。いずれも底部は糸切り難しで、一部には板状圧痕がみられる。器形は、全体的にやや低平な感じがするものである。また、体部は底部とほぼ同じ厚みで作られており、その立ち上がりは急である。しかし、体部や口縁部の形態に若干の違いがあり、以下のように分けられる。 723～726、729～731、733～735は体部が直線的に口縁部にいたるものである。これらの口縁部はいずれも尖り気味に仕上げるが、口縁部にむかい徐々に細くなるもの（724、730、731、733～735）、先端部ちかくで急に尖り気味になるもの（723、725、726、729）などがある。 727、728、732、736は、体部中程がややふくらみ、口縁部がわずかに外反するものである。これらについても、口縁部は尖り気味である。 |
| 土坑の時期 | 以上、本土坑の土器は一括性の高いもので、口径や形態からその時期は、14世紀中葉に位置づけられるものと思われる。 |

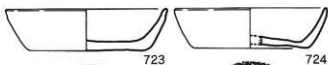


4,800m



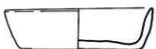
0 1m

第166圖 SK613

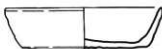


723

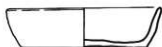
724



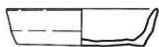
725



726



727



728



729



730



731



732



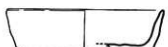
733



734



735



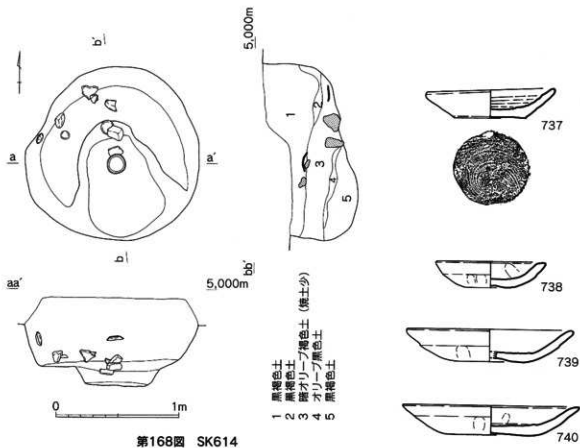
0 10cm

736

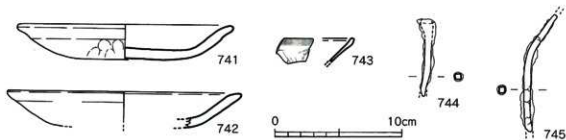
第167圖 SK613出土遺物

(73) SK614

- 位置と検出面 SK614 (第168図) は第III面の調査区西南隅で検出された。
- 規模 土坑の平面プランは円形を呈する。規模は径1.4mを測る。土坑は二段掘り状を呈し、深さは0.55～0.7mを測る。土坑の中層 (第3層) からは焼土が検出されている。また、京都系土師器などの遺物は10cm大の礫とともに、下層から中層にかけて出土した。
- 土師質土器 出土遺物 (第169図) のうち737は、底部糸切りの土師質土器である。口径10cm程のもので、体部は斜方向に直線的にのび、内面にロクロ痕が残る。
- 京都系土師器 738～742は京都系土師器である。口径は、738が8cm、739が13cm、740が14cm、741が16.5cm、742が18.5cmで、少なくとも5段階の法量分化が確認される。
- 青花 743は中国漳州麻産青花碗である。
- 鉄製釘 744、745は鉄製釘である。744は頭部を折り曲げるものである。先端部を欠くが、断面は方形を呈する。745は頭部、先端部を欠くが、現存長9.3cmと長い。
- 土坑の時期 以上の出土遺物から、本遺構は16世紀後葉に位置づけられる。



第168図 SK614



第169図 SK614出土遺物

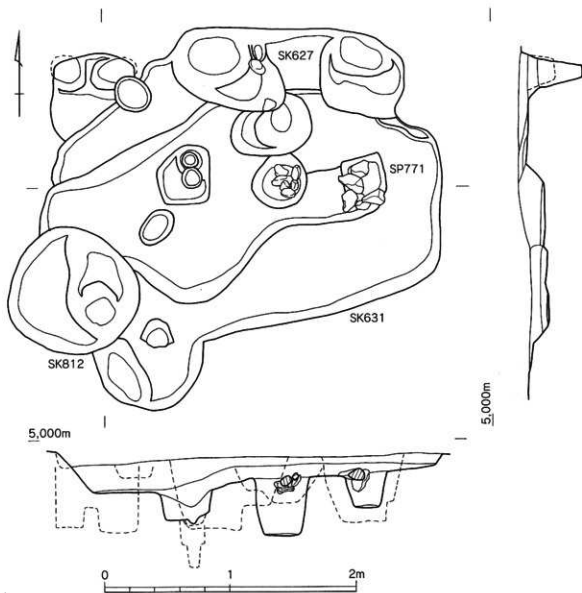
(74) SK627、SK631、SP771、SK812

位置と検出面 SK631(第170図)は、調査区中央の東端にあたるE62区に位置する。土坑は第Ⅲ面から検出されたもので、周辺にはSK602やSD804などの遺構がみられる。SK602とは重複しないが、SD804とは重複し、本遺構がこれを切る。また、これらとは別に、本遺構内には土坑や柱穴などの小規模な遺構が多数重複する。

規模 SK631は不定形を呈する。その規模は、東西方向の最大長が3.2m、南北方向の最大長が2.9mである。深さは0.1~0.3mで、遺構内に重複する他の土坑や柱穴などを除いて考えても、床面の起伏が目立つ。土坑内は二段掘り状を呈しており、0.1~0.2mの段がつく。二段目の床面も東から西に向かい傾斜しており、西側が最深部となる。

遺物出土状況 土坑内の遺物は、土坑規模に比して量も少なく、目立ったものもない。そのため、時期の決定が難しい。しかし、後述する本遺構に重複する遺構の時期などを参考にすれば、本遺構は14世紀代まで遡る可能性をもつ。

以下では、本土坑に重複する遺構の紹介を行なう。



第170図 大友75次SK627、SK631、SP771、SK812

SK627

SK627 (第170図) は、SK631内の北端で重複する。前後関係は必ずしも明確ではないが、SK631より後出する可能性をもつ。

平面形は楕円形基調を呈し、その規模は長軸0.9m、幅0.7mである。土坑内は二段掘りとなっており、深さは0.4~0.6mを測る。埋土から土器片などが出土した。

出土遺物 (第171図) のうち、746は瓦質土器鍋である。口縁部が短くくの字状に折れ、内面には横方向のハケメが施される。747は東播系の須恵器こね鉢である。748は土鍾である。749は鉄製釘で、頭部を折り曲げ、断面方形を呈するものである。以上は14世紀代に比定される。

SP771

SP771 (第170図) は、SK631内の中央やや東寄りの位置で重複するもので、SK631を切る。

平面形は一辺0.35mの方形を呈する。深さは、SK631の床面から0.25~0.3mを測る。柱穴内には、10~20cm大の礫が数個みられる。柱の根締めで使用されたものであろう。

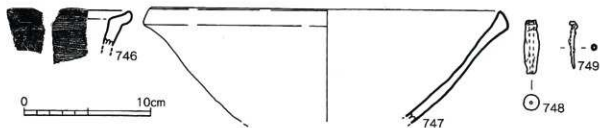
出土遺物 (第172図) には、土製の壁体片がある。750の壁体本体は約3cmで、内側に鉄滓が付着する。壁体の断面には竹管状の圧痕が残っており、壁体の芯に竹管を使用していることが分かる。751は厚さ5cmを測る壁体片である。やはり断面に、竹管状の圧痕が残る。鉄滓等の付着は認められない。

時期を決定できる遺物がなく、遺構の時期は不明である。

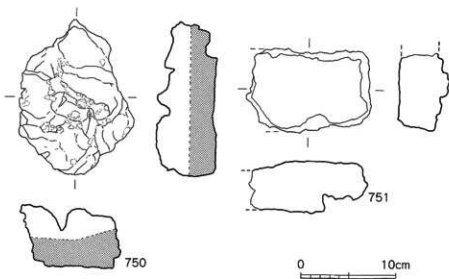
SK812

SK812 (第170図) は、SK631の西端で重複する。切り合い関係は必ずしも明確ではないが、SK631を切っている可能性が高い。

円形の平面プランを呈し、径0.9~1.0mを測る。深さは0.1mで、床面は緩やかな起伏をもつ。目立った出土遺物はなく、時期は不明である。



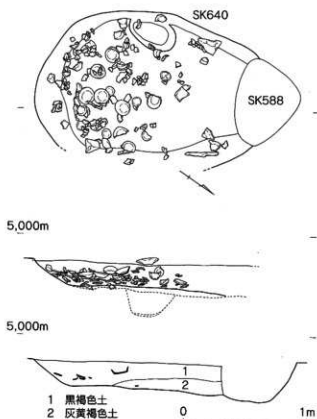
第171図 大友75次SK627出土遺物



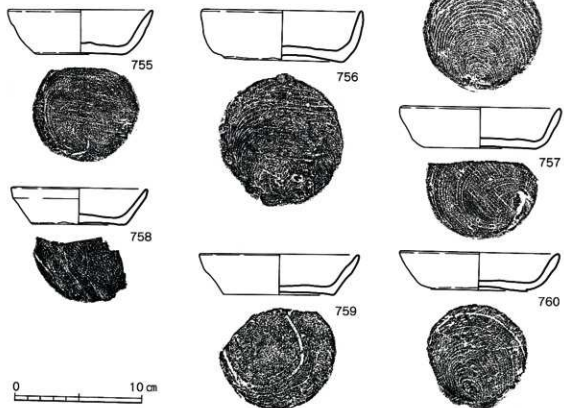
第172図 大友75次SP771出土遺物

(75) SK640

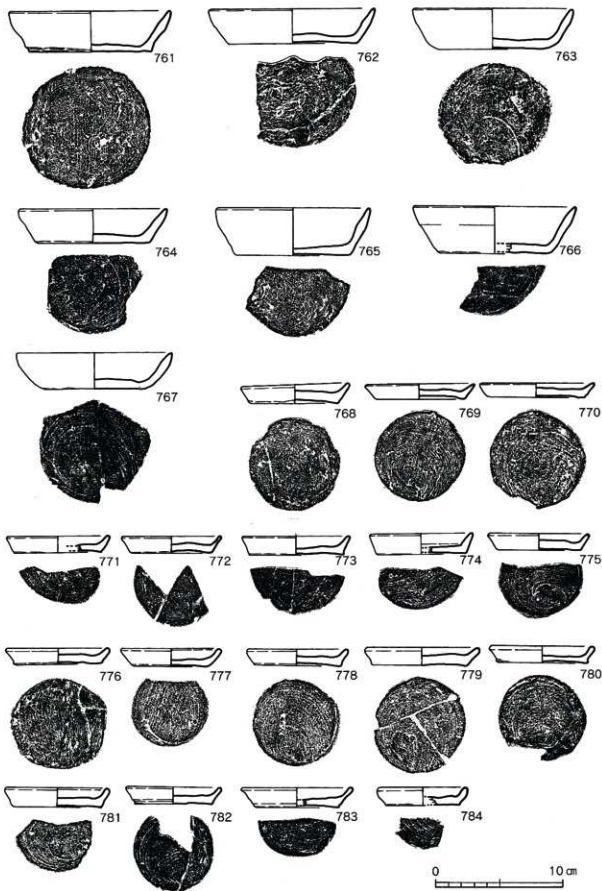
- 位置と検出面** SK640(第173図)は調査区南西隅のD62区に位置する。第三面で検出されたもので、周辺には柱穴やSK514などの土坑がみられる。SK640はSK588(後段192頁)と重複しており、SK588に切られている。また、同位置の第II面からSK270、SK321が検出されているが、層位的にSK640はこれらに先行する。
- 規模** 土坑は、SKL588や上層のSK321に切られ一部遺構線が不明な部分もあるが、南北方向に長軸を有する楕円形基調を呈するものである。その規模は、長軸2.15m、幅1.3mを測る。深さは0.2~0.25mで、床面は南から北に向かい傾斜する。壁の立ち上がりは比較的緩やかである。
- 遺物出土状況** 埋土は2層に分層され、上層の第1層から大量の土師質土器が出土した。土師質土器は完形品も多く含まれるもので、土坑の南半に集中して出土した。土坑が一定程度埋没した段階で一括放棄されたものであろう。また、土坑の南西隅からは刀子が出土した。刀子は完形にちかく、土師質土器とともに意識的に土坑内に遺棄された可能性が高い。
- 出土遺物** 出土遺物(第174~176図)は土師質土器のほか須恵器、中国産磁器、鉄製品などがみられる。
- 土師質土器** 752~767は土師質土器環で、いずれも底部糸切りである。口径は10.6~13.4cmで、12cm代の中頃前後にピークがある。器高は2.7~4.0cmで、3cm代中頃前後にピークがある。全体的に、口径に比し低平な感がある。底径は7.2~10.2cmで、8cm代のものが主体を占める。これらは、形態によりI~III群に分類される。
- I群** I群(752~754)は、体部上半がわずかに外反するものである。体部は底部と同様な厚みで、体部は直角気味に立ち上がる。しかし、立ち上がり部は丸みをもっている。体部上半に強いナデが施されるため、緩やかに外反気味になる。後述するIII群も、体部上半の強いナデにより端部が尖り気味になるが、I群と成形技法としては共通する。
- II群** II群(755~758、760)は、体部が直線的あるいは内湾気味のものである。I群と同様に、体部が底部と同じ厚みをもつ。体部は一部を除き直立気味で、先端部は尖り気味である。口縁部の形状は、体部上半に施されるナデに起因するものであろう。
- III群** III群(759、761~767)は、体部中程がやや膨らみ気味のため、尖り気味の口縁部が強調されるものである。体部の厚みは底部と変わらず、直立気味に立ち上がる。体部から口縁にかけての形態変化は、体部成形時のナデ上げの強弱により生じたものであろう。
- 小皿** 768~784は小皿で、いずれも底部糸切りである。口径は6.6~8.6cmで、8cm前後にピークがある。器高は1.2~1.7cmで、1cm代前半にピークがある。全体として、低平な感がある。これらは、形態によりI、II群に分けられる。
- I群** I群(768~776、778~783)は、体部が直線的に短く立ち上がるもので、その立ち上がりは急である。総じて、体部は三角形気味に底部から引き上げる。強いナデにより、体部がやや反り気味のものも多い。また、体部は底部よりも器壁が薄いものもあるが、全体的には顕著な差はない。
- II群** II群(777、784)は、体部が内湾気味に口縁部にいたるもので、量的には少数である。
- 京都系土師器** 785は京都系土師器である。器壁が比較的薄く、口縁部ちかくがわずかに外反気味である。16世紀の京都系土師器でも、やや古相に位置づけられる。
- 白磁** 786は中国産白磁口禿皿の底部である。14世紀代に比定される。
- 東播系** 787は東播系の須恵器こね鉢である。
- 鉄製刀子** 788は鉄製刀子である。基部と先端部を一部欠損するが、ほぼ全容が分かるものである。現存長27.0cmを図る。
- 土坑の時期** 以上のうち、16世紀代に下る遺物もあるが、これを部分的な混ざり込みと理解し、本土坑の時期は14世紀中葉~後葉としたい。



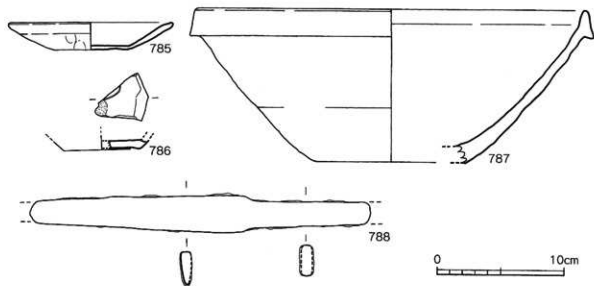
第173図 大友75次SK640



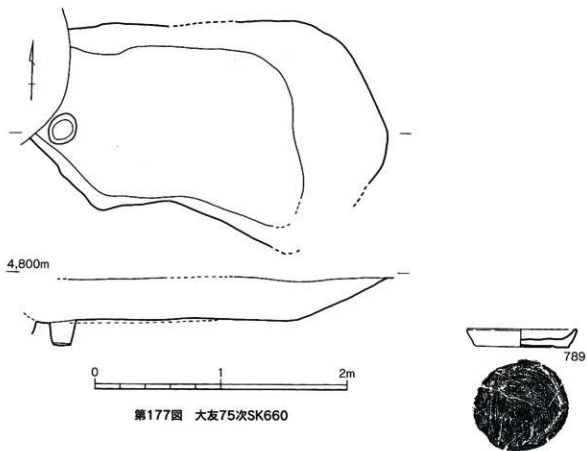
第174図 大友75次SK640出土遺物(1)



第175图 大友75次SK640出土遺物(2)



第176図 大友75次SK640出土遺物(3)



第177図 大友75次SK660



第178図 大友75次SK660出土遺物

(76) SK660

位置と検出面 SK660 (第177図)は調査区中央やや西寄りのE61・E62区にまたがり位置する。第Ⅲ面から検出されたもので、周辺には、SK445、SK536などの大型遺構がみられる。このうちSK445と重複しており、本遺構がSK445に切られる。また、同位置の第Ⅱ面にはSK275、SK357などがあり、層的には本遺構がこれらに先行する。

規模 平面プランは、一部がSK445に切れ全面形が不明であるが、東西方向に長い不定形を呈する。その規模は、東西の現存長が1.6m、南北の現存長が1.4~1.8mである。深さは0.3mで、床面は平坦である。

遺物出土状況 土坑内からの遺物出土は散発的で、少量であった。

出土遺物 出土遺物 (第178図)のうち、789は底部糸切りの土師質土器小皿である。体部は短く三角形気味に立ち上げられる。790、791は瓦質土器土鍋である。ともに口縁部が短く外方に折れ、内面には横方向のハケメが施される。

土坑の時期 以上から、本遺構の時期は14世紀中葉前後に位置づけられる。

(77) SK676

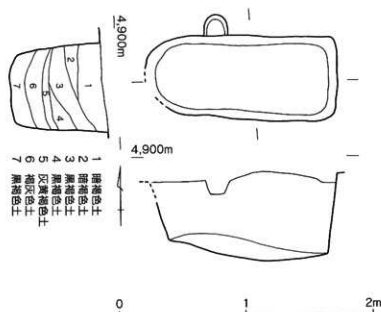
位置と環境 SK676 (第179図)は調査区中央のE61・F61区にまたがり位置するもので、第Ⅲ面から検出された。周辺には小土坑などが多数みられ、いくつかの遺構と重複し、これを切っている。また、同位置の第Ⅱ面からは、16世紀後葉~末に比定されるSK213が確認されており、層的に本遺構がSK213に先行する。

規模 土坑は、東西方向に長軸をもつ長方形である。その規模は、東西1.5m、南北0.65mである。深さは0.45~0.65mで、床面は西から東に向かい傾斜している。

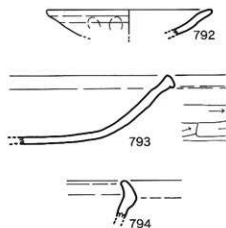
遺物出土状況 土坑内からの出土遺物は、少量で散発的である。

出土遺物 出土遺物 (第180図)のうち、792は京都系土師器である。793は瓦質土器鍋である。浅い丸底を呈するもので、外面に横方向のヘラケズリが施される。794は東播系須恵器こね鉢である。

土坑の時期 以上の出土遺物から、本土坑は16世紀後葉に位置づけられる。



第179図 大友75次SK676



第180図 大友75次SK676出土遺物

(78) SK691, SK744

位置と調査区 SK691, SK744 (第181図)は、調査区西側のD62区に位置する。第三面で検出されたもので、本土坑の北側にはSK445がみられる。SK691とSK744は重複しており、SK691がSK744を切る。

SK691 SK691は、東西方向に長い長方形基調を呈する。その規模は、東西方向が2.1m、南北方向が1.0～1.1mである。深さは、SK744の床面から0.25～0.35mである。床面は比較的平坦であるが、西から東へ向かい傾斜する。

遺物出土状況 土坑内からは、10～30cm大の礫とともに土師質土器などが出土した。これらは、土坑の西半に集中しており、その中層から上層にかけて認められた。土坑の埋土は大きく2層に分かれるが、出土遺物は上層の第1層に伴うものと考えられる。

出土遺物 出土遺物(第182図)のうち、795と796は土師質土器環で、ともに底部糸切りである。体部は底部と同じ厚みで、立ち上がり部は丸みをもつ。上半はわずかに外反気味である。797と798は土師質土器小皿である。ともに底部糸切りで、体部が斜方向にのびる。体部は底部と同じ厚みで、797は口縁部が尖り気味である。799は東播系須恵器こね鉢である。800、801は中国産磁器で、800は11～12世紀の玉縁口縁を呈する白磁碗。801は口禿の白磁皿。802が土師質土器片加工の円盤状土製品。803、804は鉄製の釘である。

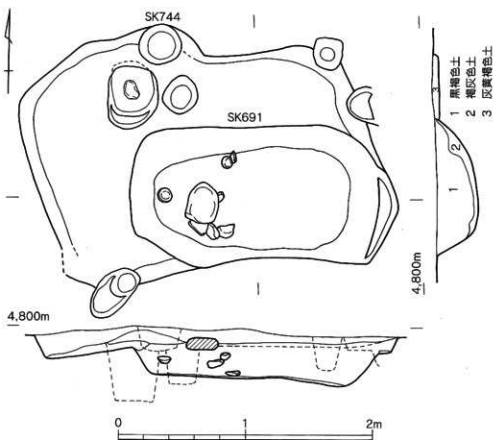
土坑の時期 以上から、本土坑は14世紀前半代に位置づけられる。

SK744 SK744は、方形基調の不定形を呈する。その規模は、東西方向が2.6m、南北方向が1.6～1.9mで

規模 である。土坑内の南東部をSK691により切られている。このほか、いくつかの柱穴と重複している。

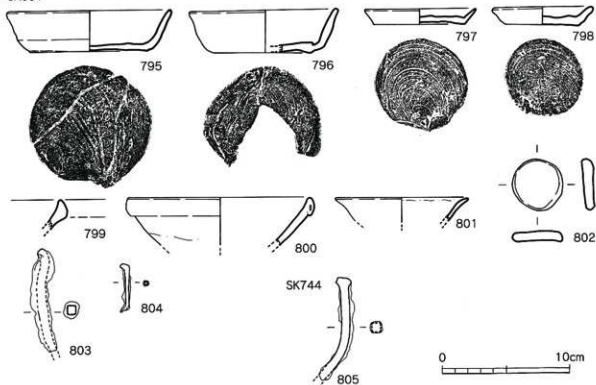
出土遺物 出土遺物(第182図)は805の鉄製釘のみである。頭部を折り曲げ、断面方形呈するものである。

土坑の時期 時期を決定できる遺物がないが、SK691より遅るものである。



第181図 大友75次SK691,SK744

SK691



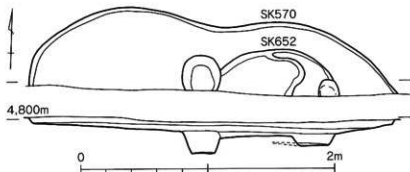
第182図 大友75次SK691,SK744出土遺物

(79) SK570, SK652

位置と検出面 SK570, SK652 (第183図) は、調査区中央やや北寄りのD61・E61区にまたがり位置する。第三面で検出されたもので、南半は水路により破壊される。土坑の東側と北側は遺構が薄いが、西側にはSK530などがみられる。SK570とSK652は重複しており、SK570の中央やや東寄りに位置している。しかし、前後関係は不明である。

SK570 SK570は東西方向に長い不定形を呈すると思われるが、南半が破壊されているため全容は不明である。その規模は、現状で東西が2.9m、南北が0.5~0.65mを測る。深さは0.05~0.1mと浅い。目立った出土遺物はない。

SK652 SK652は円形基調を呈するもので、その規模は現状で、東西1.0m、南北0.4mである。深さはSK570の床面から0.05~0.1mと浅い。目立った出土遺物はない。



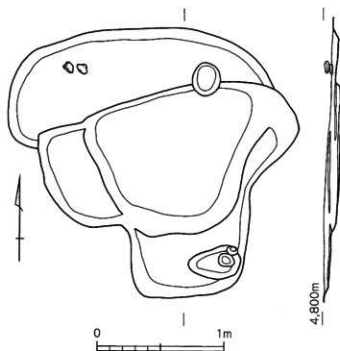
第183図 大友75次SK570,SK652

(80) SK662

位置と検出面 SK662 (第184図)は調査区西側のD62区に位置する。第Ⅲ面で検出されたもので、本遺構の北側にはSK691、SK744がみられる。また、同位置の第Ⅱ層にはSK171が確認されている。層位的には、本遺構がSK171に先行する。遺構はいくつかの土坑が重複しており、SK662は中央に位置する。しかし、これらの前後関係は明らかではない。

規模 SK662の平面形は不定形を呈する。その規模は1.4×1.15mで、深さは0.1mである。土坑は比較的浅く、床面は平坦である。

土坑の時期 土坑内からは、目立った出土遺物は認められなかった。そのため、本遺構の時期を決めることはできない。



第184図 大友75次SK662

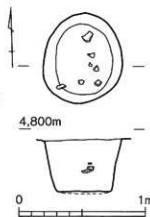
(81) SK694

位置と検出面 SK694 (第185図)は調査区北側中央のE61区に位置する。第Ⅲ面で検出された。周辺は比較的遺構が薄い。

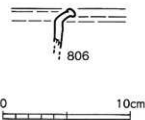
規模 土坑の平面形は円形で、その規模は径0.6~0.7mである。深さは0.4mで、床面は平坦である。また、壁の立ち上がりは直立気味である。土坑内からの出土遺物は小破片で、散発的である。

出土遺物 出土遺物 (第186図)のうち、806は瓦質土器の鍋と思われる。口縁部が外方に折れる。

土坑の時期 本土坑は14世紀代に比定される。



第185図 大友75次SK694



第186図 大友75次SK694出土遺物

(82) SK700

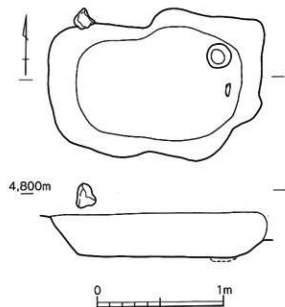
位置と検出面 SK700 (第187図)は調査区北西部のD61区に位置する。第Ⅲ面で検出したが、周辺には大小の遺構が密集する。本遺構はいくつかの遺構と重複するが、SK701を切り、SK530に切られる。

規模 土坑の平面形は長方形基調であるが、遺構ラインは直線的ではない。東西方向に長軸を有するもので、その規模は東西1.7m、南北0.85~1.2mである。深さは0.3~0.35mで、床面は平坦である。壁はやや斜めに立ち上がる。

遺物出土状況 土坑内からの遺物の出土は散発的であった。

出土遺物 出土遺物(第188図)のうち、807は瓦質土器鍋の脚で、先端部を欠く。

土坑の時期 土坑の時期は、出土遺物が少数なので決め難いが、14世紀代に位置づけておきたい。



第187図 大友75次SK700



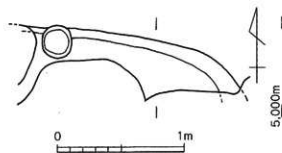
第188図 大友75次SK700出土遺物

(83) SK701

位置と検出面 SK701 (第189図)は調査区北西部のD61区に位置し、第3面で検出された。土坑はSK700など複

数の遺構から切られており、本来の平面形は不明である。その規模は、残存する部分で、東西の長さ1.7mである。土坑内からの出土遺物は散発的であった。

出土遺物 出土遺物(第190図)のうち、808は瓦質土器鍋である。直線的な体部から、口縁部が短く外方に折れる。内面には横方向のハケメが施される。14世紀代に比定される。



第189図 大友75次SK701



第190図 大友75次SK701出土遺物

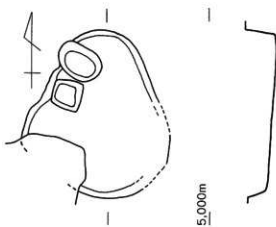
(84) SK714

位置と検出面 SK714(第192図)は調査区中央付近のE61区に位置する。第Ⅲ面で検出されたもので、本遺構は他遺構の一部を切られる。

規模 土坑は、他遺構と重複しているため全形は不明だが、南北に長軸をもつ下膨れの楕円形を呈するものと思われる。その規模は、南北1.3m、東西の最大幅1.2mである。深さ0.2~0.25mで、床面は南から北に向かい傾斜する。壁は直立気味に立ち上がる。

遺物出土状況 土坑内からの出土遺物は少なく、わずかに鉄製の釘が出土したのみである。

出土遺物 出土遺物(第191図)は809の鉄製釘である。頭部を折り曲げ、断面方形を呈するもので、先端部を欠失する。



第191図 大友75次SK714出土遺物

第192図 大友75次SK714

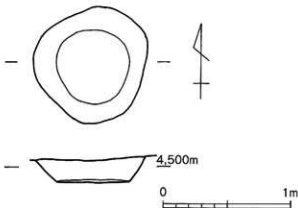
(85) SK728

位置と検出面 SK728(第193図)は第Ⅲ面で検出された。土坑は調査区北西隅のC61区に位置しており、周辺には遺構が密集している。同位置の第Ⅱ面ではSK205が確認されている。層位的に、本土坑がSK205に先行する。

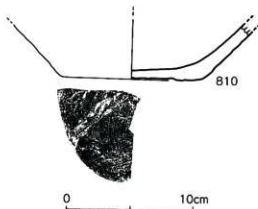
規模 土坑の平面プランは円形を呈する。規模は、径0.9m、深さ0.2mである。床面は平坦で、壁は斜方向に立ち上がる。土坑内からの遺物は少量で、散発的であった。

出土遺物 出土遺物(第194図)は、810の東播系須恵器こね鉢の底部と思われる。復元底部径11.0cmを測り、底面には糸切り痕が残る。

土坑の時期 本土坑の時期は14世紀代に位置づけられる。



第193図 大友75次SK728



第194図 大友75次SK728出土遺物

(86) SK737

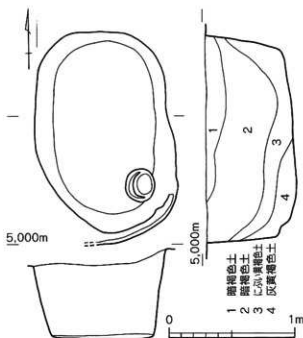
位置と検出面 SK737 (第195図)は調査区中央やや南寄りのE62・F62区に位置する。第Ⅱ面で検出されたもので、周辺にはSK148、SK217、SE216などの大型遺構がみられる。

規模 土坑は南北方向に長軸をもつ楕円形を呈する。その規模は、南北1.6m、東西1.0~1.1mである。深さは0.6~0.7mと比較的深く、壁は直立気味に立ち上がる。床面は平坦であるが、北から南に向かい緩やかに傾斜する。

土層堆積状況 土坑内の埋土堆積状況を見ると、南から北に向かい堆積していった状況が読み取れる。

土坑の時期 遺物については、土坑内から目立ったものは確認されなかった。そのため、本土坑の時期を明確にすることはできない。

しかし、同じ第Ⅱ面において近接して検出された遺構がいずれも16世紀代あることを考えれば、本遺構も16世紀代に位置づけられよう。



第195図 大友75次SK737

(87) SK739、SK764

位置と検出面 SK739、SK764 (第196図)は、中央やや西寄りのE61・E62区にまたがり位置する。第Ⅲ面で検出されたもので、隣接してSK536やSK660などがみられる。本遺構はSK764と重複しており、SK764に切られる。また、同位置の第Ⅱ面からはSK152が確認されている。層的には、本遺構がSK152に先行する。

規模 SK739は、南北方向に長軸をもつ不定形を呈する。その規模は、南北2.0m、東西1.3~1.9mを測る。深さは2.0~2.15mで、他の土坑に比べると深さが際立つ。底面は南北方向に長軸をもつ楕円形を呈し、南北1.45m、東西0.95mである。床面は西から東に向かい傾斜し、壁は直立気味に立ち上がる。

遺物出土状況 土坑内の床面付近から土師質土器が2個体出土した。環はいずれもほぼ完形品である。このほかにも埋土中から土器片が確認された。

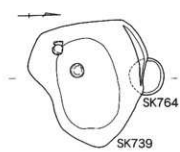
出土遺物 土師質土器 出土遺物 (第197図)のうち、811~813は底部糸切りの土師質土器環である。811と812は床面付近から出土したものである。両者とも体部立ち上がり部がすぼまり、器壁が薄くなる特徴を有する。813は体部が底部と同じ厚みをもち、斜方向に立ち上がる。

瓦質土器 814、815、817は瓦質土器鍋である。814は外面に鈿が付されるものである。鈿は外面最上部に付され、鈿下の体部は貼り付けの際のナデにより凹み気味である。815は直立気味の体部上半から口縁部が短く外方に折れる。内外面にハケメが施される。817も815と同様な形態である。

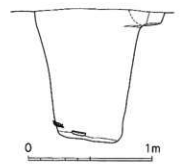
青磁 816は中国産青磁盤である。

土鍾 818は土製の鍾である。
 土坑の時期 以上の出土遺物からSK739は14世紀前葉に位置づけられる。

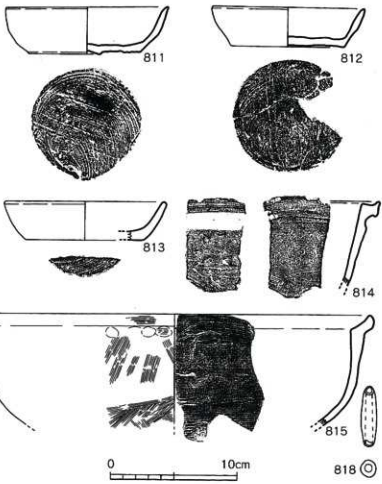
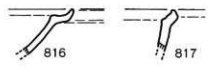
SK764 SK764は、SK739の東端で重複し、SK739を切る。平面プランは円形を呈し、その規模は径0.6m、
 規模 深さ0.2mを測る。土坑内からは土器片などが散発的に出土した。
 出土遺物 出土遺物（第198図）のうち、819は土師質土器環である。820は底部糸切りの土師質土器小皿である。底部と同じ厚みの体部が直立気味に立ち上げられる。821は鉄製の釘か。
 土坑の時期 以上の出土遺物と切り合い関係から、SK764は14世紀前葉以降に比定されよう。



4.800m



第196図 大友75次SK739、SK764



第197図 大友75次SK739出土遺物



第198図 大友75次SK764出土遺物

(88) SK182

位置と検出面 SK182 (第199図)は調査区南西隅のD62区に位置する。第II面で検出されたもので、遺構の大部分は調査区外に及ぶ。本遺構の北東側に隣接して、SK171、SK270、SK321などの土坑が展開するが、柱穴はあまりみられない。

規模 本遺構は大半が調査区外に及ぶため、その全容は不明である。調査では、一部調査区外まで遺構の確認を行なった。その規模は、南北が5.2mを測る大型のもので、深さは0.6~1.3mである。

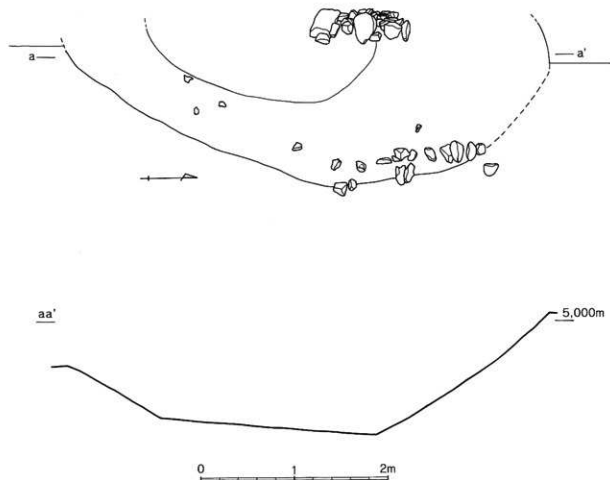
遺構の東側から中央にかけては、10~40cm大の礫がみられる。これらはいずれも上層から出土している。

出土遺物 出土遺物(第200、201図)には、土師質土器、京都系土師器、瓦質土器、焼締陶器、中国産磁器などがみられる。

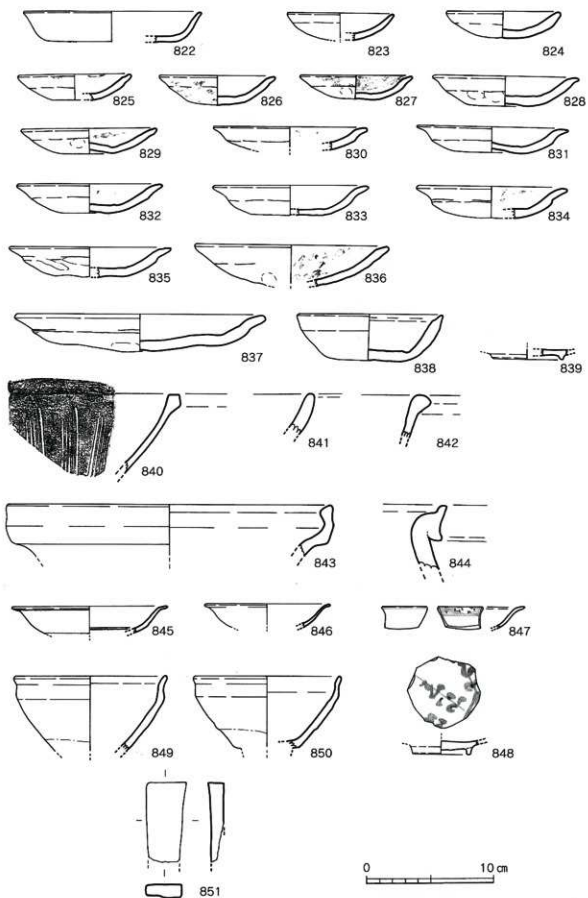
土師質土器 822は土師質土器である。破片資料に加え残存状況も良くないので、明瞭に観察できないが、底部は糸切りと思われる。体部は底部と同じ厚みをもち斜方向にのび、口縁部がわずかに反り気味におさめる。体部の立ち上がり部は丸みをもつ。復元口径14.2cmを測るが、小破片のため復元に誤差が出ていることも考えられる。14世紀以前のものである。

京都系土師器 823~838は京都系土師器で、皿(823~837)と坏(838)がある。皿は口径から、I群(口径9cm前後)、II群(口径12cm前後)、III群(口径13cm前後)、IV群(口径15cm前後)、V群(口径20cm前後)に分類できる。

I群 I群は8.4~9.2cmの口径である。これらは口縁形態によりいくつかに分けられる。口縁が外反

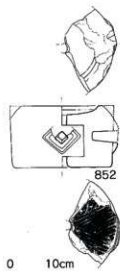


第199図 大友75次SK182



第200图 大友75次SK182出土遺物(1)

| | |
|-------|--|
| II群 | しないもの(823、824)と外反するもの(825~827)である。これらの違いは、口縁付近にナデを施す際のナデ方に起因するものと考えられる。また、825~827には口縁端部を中心にスス状付着物がみられる。灯火器として利用されたものであろう。 |
| III群 | II群(825~834)は10.5~12.4cmの口径である。口縁形態をみると、ほとんど外反しないもの(829)もあるが、大半は口縁部が短く外反する。 |
| IV群 | III群(835)は1点であるが、12.8cmの口径である。口縁部は短く外反する。 |
| V群 | IV群(836)も1点のみで、口径15.4cmを測る。これは口縁部がほとんど外反しない。体内内面には、灯火器として利用されたことを示すスス状付着物がみられる。 |
| 坏 | V群(837)も1点のみで、口径20.0cmを測る。全体に厚手の器壁を有し、口縁部が短く外に折れるように外反する。 |
| 瓦質土器 | 838は坏である。皿の器高は3cmを超すことがなかったが、884は3cmを大きく超える。口径が11.6cmと比較的小型であるに対し、器高が高いので皿とは全く異なった印象を受ける。口縁部は外反せず、強いナデにより端部が尖り気味になる。 |
| 備前焼 | 以上の京都系土師器は、京都系土師器2、3期に相当するものである。 |
| 常滑焼 | 840~842は瓦質土器である。840は摺鉢である。口縁部外面が方形に肥厚するもので、体部は比較的薄手である。内面には5本単位の摺目が比較的近接してみられる。生産地、時期とも不明である。841、842は鉢の口縁部である。842は口縁部外面を肥厚させるもので、底部に高台が付されるものであろう。16世紀代に比定される。 |
| 白磁 | 843、844は焼締陶器である。843は備前焼摺鉢である。口縁部が内湾気味に直立するもので、外面に凹線はみられない。乗岡編年の6a期にあたる。844は口縁部がN字状を呈する常滑焼で、14世紀後半~15世紀前半に比定される。 |
| 青花 | 839、845~848は中国産磁器である。839、846は白磁皿である。839は底部で、口縁部が端反りになるものであろう。846は口縁部端反りである。以上は、15世紀後半~16世紀前半に比定される。845、847、848は青花である。847は景德鎮窯系皿で、端反りの口縁部内側に四方櫛文がみられる。小野分類の皿B2群にあたる。845、848は漳州窯系のものである。 |
| 天目 | 849、850は瀬戸・美濃系の天目碗である。 |
| 砥石 | 851は砥石である。欠損品であるが、幅3.2cmの小型品である。 |
| 茶臼 | 852は茶臼の小白である。挽手穴周辺には菱形の装飾がみられる。 |
| 遺構の時期 | 以上の遺物の中には古相のものも含まれるが、本遺構の時期としては、16世紀後葉~末に位置づけられる。 |



第201図 大友75次 SK182出土遺物(2)